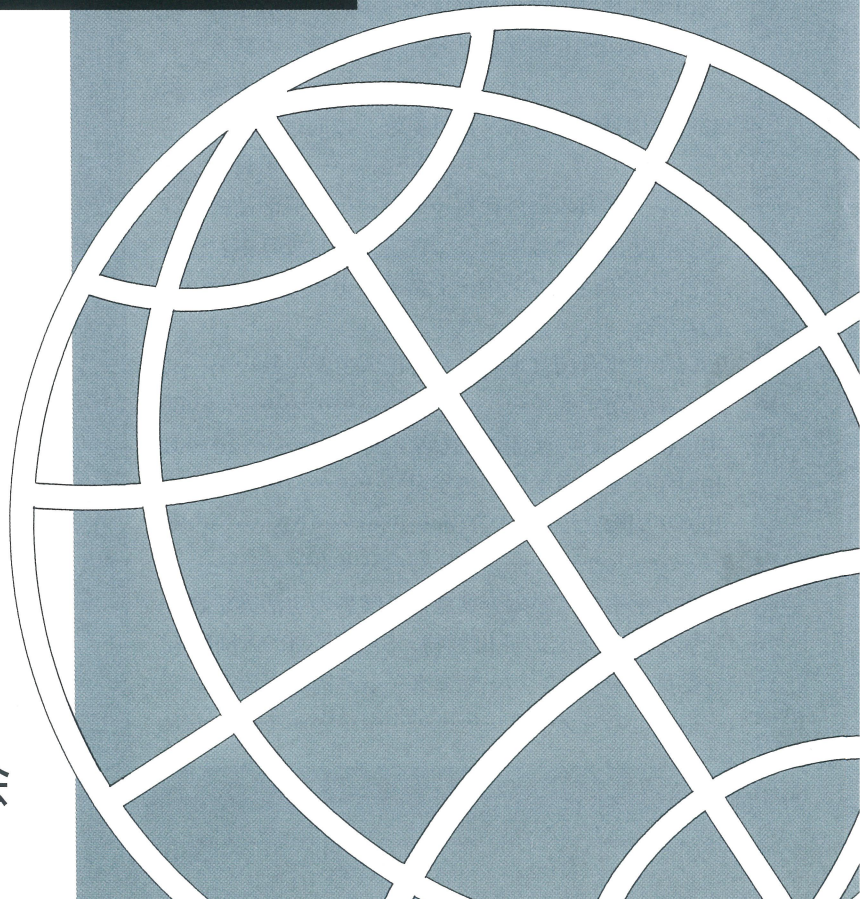
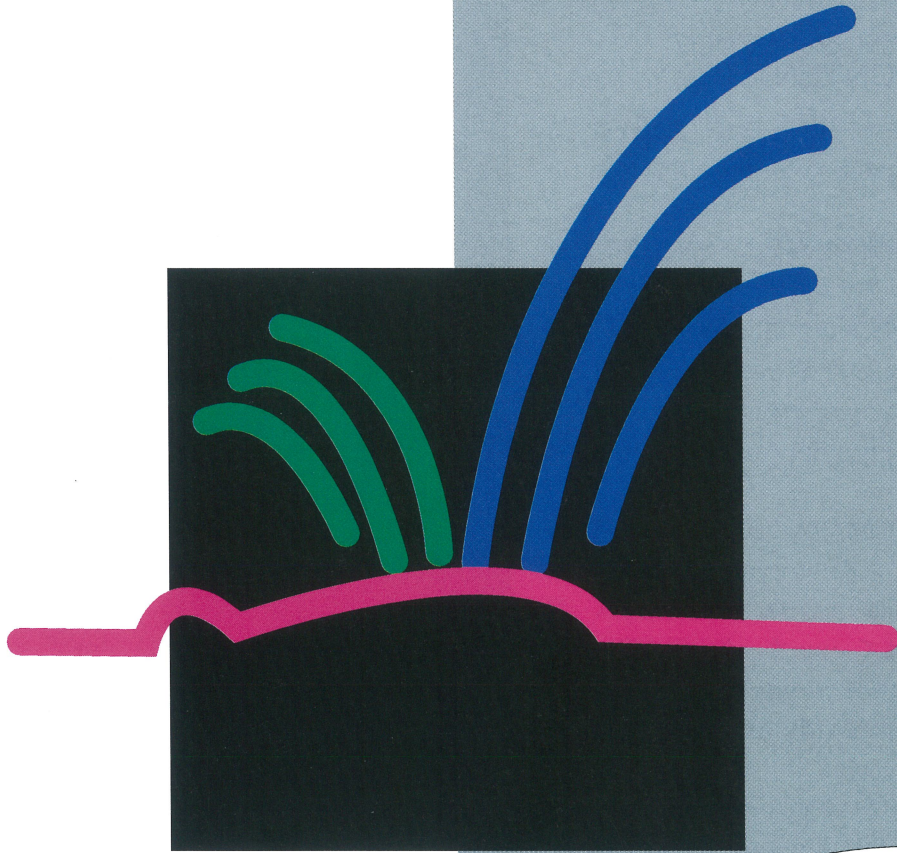


国際交流レター

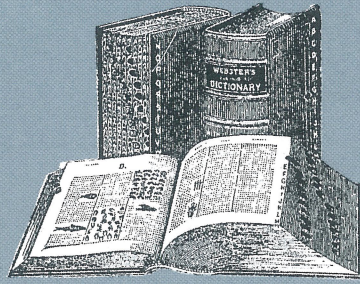
vol. 17



INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

熊本学園大学国際交流委員会

'95.3.31



国際交流レター Vol.17 CONTENTS

国際理解への道……………学長 岩野茂道	3
本学の国際交流プログラム……………勝部伸夫	4
トピックス	
クマモト国際交流週間「特別ゲスト講義」開催	16
ドイツとの交流プログラム開始……………	17
大田大学校との長期交換留学制度開始……………	17
外国人留学生弁論大会の審査を終えて…尾崎勇	18
交換教員往来……………	19
1994年研修団往来……………	19
教員交流	
まだ心に残っている熊本の人の親切…………尹光鳳	20
熊本の印象 — オアシス……………郭来舜	20
My Year in Kumamoto ……ロバート・スミス	21
MSUへの留学を終えて ……カーク・マスデン	21
大田大学校の学生たち……………嵯峨一郎	22
熊本・熊本学園大学の思い出……………洪承藹	23
学生交流	
モンタナ研修サマープログラム……………朴哲洙	24
大田大学校訪問学生研修団……………嵯峨一郎	25
1994年度国際経済学科「外国事情研修」を終えて ……………酒井重喜	26
1996年度外国語学部「海外研修」に向けて ……………吉田良夫	26
東アジア学科の海外研修……………服部昌之	27
交換留学生による座談会「熊本、そして日本」…	27
派遣留学生へのアンケート結果……………	29
DATA	
1994年度出身国（地域）別外国人留学生数……………	30
1994年度留学生……………	30
本学留学生への交流の主な案内……………	31
1994年度本学留学生の奨学金……………	31
1994年国際交流EVENTS ……	32
<hr/>	
日本人学生の実態調査実施／留学生の生活実態調査 実施／国際交流関係出版物／SEMINARS／国際交 流委員会が新メンバーでスタート／国際交流センタ ー事務室のスタッフ……………	34

国際理解への道

学長 岩野 茂道

ソビエト体制が崩壊し、世界はいまポスト冷戦の秩序を模索するという新しい困難な課題に直面しています。イデオロギーの対立でもって構築されてきた世界史が、「自由と平等」の勝利というかたちで一応の終焉を迎えるに至った、とフランシス・フクヤマ (Francis Fukuyama) *¹が述べ、したがって対立は今や国家と国家との間にあるのではなく、

文明と文明の間のそれに移行したと、ハンチントン (Samuel P. Huntington) *²が鋭く喝破しました。セルビア人とクロアチア人とのサラエボでの悲しい民族殺戮や、アラブ・イスラムとキリスト教国との終わりなき抗争の激化を見るかぎりでは、このような観察がそれほど大きく間違っているとは思えません。

たんに宗教や人種、歴史や伝統の違いのみならず、言語の違いも相互不信の大きな種となっているようです。熊本学園大学は、昨年外国語学部と社会福祉学部を新設し、総合大学として新しく出発しました。異なる文化圏の人々



岩野茂道学長

を理解するためには、単なる論理のレベルを超え、感情の領域にまで踏み込んだ語らいが望ましいのです。人はパンのみで生きているのではない。信仰や思想、それも古代からつながるそれぞれの民族の歴史と伝統を誇り、高い精神の世界に生きてこそ初めて真の安息を得るもののようです。このことは、自己の文化の物差しで他の民族の文化を批判することの難しさを教えています。

外国語を学ぶことは、異なる国、異なる民族の歴史と伝統を理解するもっとも確かな道であります。しかし、本当に外国を理解するには、できることなら、いつも絶えることなく相互に接触し、ともに行動し、異なる立場に理解を示し、お互いの意志と愛情を確認し合うという経験を普段に積み重ねることです。わが熊本学園大学が、アメリカを始めアジアの諸国、そしてイギリス、フランスおよびドイツの諸大学と国際交流のネットワークを巡らし、友情の輪を広めてきたのもこのためです。政府ベースでの外交折衝がどのように緊迫度を強めようと、国家利益の対立がどんなに険しくなろうとも、われわれの草の根の友情外交が健全に持続するかぎり、世界の平和は保証されるでしょう。そして、腹の底から人間賛歌を、皆と一緒に歌える希望を持つことができるでしょう。

*1 Francis Fukuyama ; "The End of History" : The National Interest, Summer, 1989.

*2 Samuel P. Huntington ; "The Clash of Civilization?" : Foreign Affairs, Summer, 1993.

熊本学園大学国際交流の現状

国際交流委員長 勝部伸夫

熊本学園大学が海外の大学との交流プログラムを開始してすでに10余年が過ぎる。米国・モンタナ州にあるモンタナ州立大学、モンタナ大学、キャロル大学といった諸大学との交流を皮切りに、韓国の大田大学校、中国の深圳大学へと姉妹校はアジアの国々へと広がっていった。これらの大学とは毎年あるいは隔年毎に、教員と学生の相互交換を活発に行い、大きな成果をあげてきている。その後、学生交流のプログラムは欧州の諸大学との間にも拡大していき、英国のリバプール・ジョン・モーズ大学、仏国のリヨン商科大学、独国のラインランド・プファルツ州立経済大学との間で、長期あるいは短期の学生交流が行われるようになってきた。また熊本市と米国・サンアントニオ市の姉妹関係から、テキサス州のインカーネーション大学、アワーレディオブザレイク大学とも市の選抜を経ての学生の交換が実現している。この他米国、韓国の各大学とは学生研修団の相互派遣を行っており、95年度からは中国への初の研修団派遣も予定されている。

以上が現在までの本学の交流プログラムの変遷と概要である。95年度現在、このプログラムを通じて毎年長期（1年間）の交換留学生を14名、短期（2カ月間）を19名、各大学に派遣しており、またほぼ同数の交換留学生を姉妹校から迎えるまでに至っている。このように欧米並びにアジアに開かれた本学の国際交流のプログラムは、派遣する学生の数とその地域的な広がりにおいて、国際化時代にふさわしい充実した内容のものになってきていると言ってよいであろう。（図表参照）

ところで、こうした世界各国の大学との学生を中心にした人の往来は、国際交流の持つ一見華やかなイメージとは対照的に、一步一步着実に、しかも静かに若者の国際理解の芽を育てているように見える。何よりも同じキャンパスの中で各国からの留学生が行き来している姿を目にしても全く違和感がなく自然なものになってきていることは、わたしたち自身にとっての心理的な壁が無くなってきていることだと言ってよからう。また実際に、言葉や思考、行動様式の違いを乗り越えてのコミュニケーションの輪も少しずつ広がってきているようである。

しかし、交流を通じて生まれた国際理解の芽がより大きな果実として育っていくためには、学生派遣や受け入れの人数にみられるような量的な拡大のみをもってよしとするのではなく、今後は一般の学生を含めた草の根のレベルでの交流がさらに充実して行く必要がある。そういう意味では、本学の国際交流はまだ緒についたばかりであり、次のステップに向けてさらなる飛躍が望まれている。

1995年度国際交流プログラム

月	米国・モンタナ	韓国・大田	中国・深圳	英国・リバプール	仏国・リヨン	独国・ルードビヒス ハーフェン	米国・サンアントニオ
4月							
5月	モンタナ研修 団来学（5月 中旬～6月 中旬）						
6月							
7月		夏期研修団来 学（7月中旬 ～8月中旬）					
8月	交換教員出発 （～翌年7月 交換留学生出 発（モンタナ 州立大学へ3 名、キャロル 大学へ2名、 ～翌年5月）	大田大学校訪 問学生研修団 出発（8月末 ～9月初旬）					認定留学生出 発（～翌年8 月）
9月	交換教員及び 交換留学生来 学（～翌年7 月）		深圳大学訪問 学生研修団出 発（9月中旬）	交換留学生2 名出発（～翌 年7月） 交換留学生2 名来学（～翌 年7月）	交換留学生1 名出発（～翌 年6月）	交換留学生4 名来学（～翌 年2月）	サンアントニ オ市派遣留學 生来学（～翌 年7月）
10月							
11月							
12月							
1月							
2月	短期留学生3 名出発（モン タナ州立大学 へ2月初旬 ～3月末日）	大田大学校学 生研修団来学 交換教員及び 交換留学生2 名出発（～翌 年2月）	交換留学生2 名出発（～翌 年2月）	短期留学生8 名出発（2月 初旬～3月末）		短期留学生8 名出発（2月 初旬～3月末）	
3月		交換教員及び 交換留学生4 名来学（～翌 年2月）	交換留学生2 名来学（～翌 年3月）	交換留学生4 名来学（～8 月）			

The Present State of International Exchange at Kumamoto Gakuen University

Nobuo Katsube,
Head of International Exchange Committee

It's been over 10 years since Kumamoto Gakuen University began the first exchange program with a foreign university. Starting with Montana State University, Montana University and Carroll College, in Montana, USA, our programs have spread to include our sister universities in Asia—Taejon University in Korea and Shenzhen University in China. These programs have been greatly successful in actively supporting the annual or biennial exchange of both professors and students.

Next, our programs expanded to include long and short-term exchange opportunities in Europe: with John Moores University in Liverpool, England; Lyon Graduate School of Business in France; and the Fachhochschule Rhineland-Pfalz in Germany. In addition, there has been an active student exchange between our university and Incarnate Word and Our Lady of the Lake Colleges in San Antonio, Texas, in connection with the sister city relationship between Kumamoto and San Antonio. There have also been numerous study tour groups arranged with universities in both Montana and Korea, which will also be arranged beginning in 1995 with our sister university in China.

This is a short summary of the exchange programs presently available. Through these programs, we send up to 14 long-term students and 19 short-term students to universities abroad per year, and receive approximately the same number of foreign students in exchange. With the expansion of our program in terms of both numbers of students and geographical locations available, we have tried give our program a broad range suitable for the international age.

Although such international exchange between universities sounds very exciting and exotic at first, it slowly but surely seems to have had the effect of nurturing the bud of international understanding in young people on campus. Most of all, the fact that the sight of foreign students from countries all around the world on our campus has become completely natural shows that our own psychological walls are breaking down. We seem to be expanding our circle of communication little by little, overcoming differences in language, action and way of thinking. However, in order to help this bud grow larger and bear fruit, we should not be satisfied simply with increasing the numbers of students exchanged. For this, it is necessary that the quality of exchange be improved at the grass roots level, beginning with the consciousness of the average Kumamoto Gakuen University student. In this sense, we've just gotten on the stage, and from now we can hope to begin dancing.

1995 International Exchange Programs

Month	Montana, USA	Taejon, Korea	Shenzhen, China	Liverpool, England	Lyon, France	Ludwigshafen, Germany	San Antonio, USA
April							
May	Study tour visits Kumamoto (mid-May to mid-June)						
June							
July		Summer study tour visits Kumamoto (mid-July to mid-August)					
Aug.	Exchange Professor leaves for Montana (to July/1996) Exchange students leave for Montana (MSU-3 students Carroll College- 2 students, to May 1996)	Taejon University visitation tour leaves Kumamoto (end of August to beginning of Sept.)					Kumamoto City Exchange students leave for San Antonio (to Aug. 1996)
Sept.	Exchange professor and students arrive from Montana (to July 1996)		Shenzhen University visitation tour leaves Kumamoto (mid-Sept.)	2 Exchange students leave for Liverpool and arrive in Kumamoto (to July 1996)	1 exchange student leaves for Lyon (to June 1996)	4 exchange students arrive in Kumamoto (to Feb. 1996)	San Antonio city exchange student arrives in Kumamoto (to July 1996)
Oct.							
Nov.							
Dec.							
Jan.							
Feb.	3 short-term exchange students leave for MSU (beginning of Feb. to end of March)	KGU visitation tour arrives from Taejon Exchange professor and 2 exchange students leave for Taejon (to Feb. 1996)	2 exchange students leave for Shenzhen (to Feb. 1996)	8 short-term exchange students leave for Liverpool (beginning of Feb. to end of March)		8 short term exchange students leave for Ludwigshafen (beginning of Feb. to end of March)	
March		Exchange professor and 4 exchange students arrive from Taejon (to Feb. 1996)	2 exchange students arrive from Shenzhen (to March 1996)	4 exchange students arrive from Liverpool (to Aug. 1995)			

구마모토 가쿠엔대학의 국제교류 현황

국제교류위원장 가쓰베 노부오

구마모토 가쿠엔(熊本學園) 대학이 해외대학과 교류 프로그램을 개시한 지 벌써 10년이 지났다. 미국 몬타나주에 있는 몬타나주립대학, 몬타나대학 그리고 캐롤대학과의 교류를 시작으로 한국의 대전대학교, 중국의 심천(深川)대학과의 자매교를 중심으로 아시아의 각국에 관계가 넓혀졌다. 이 대학들과 매년 또는 격년으로 교수와 학생의 상호교환을 활발하게 추진하여 큰 성과를 올렸다. 그후 학생교류 프로그램은 歐洲의 여러 대학들과의 사이에도 확대되어, 영국의 리버풀 존 몬스대학, 프랑스의 리옹상과대학, 독일의 라인란드 프와르츠 주립 경제대학과의 사이에 장기 또는 단기 학생교류가 행하여지게 되었다. 또한 구마모토市와 미국의 산 안토니오市가 자매관계인 것을 계기로 미국 텍사스주 잉가네트대학, 아우어 레디 오브 레이크대학과도 市가 선발한 학생의 상호교환이 실시되고 있다. 그밖에 미국, 한국 각 대학과는 학생연수단 상호파견이 행해지고 있으며 95년부터 중국에 첫 연수단을 파견할 예정이다.

이상이 현재까지 본교의 교류 프로그램의 변천과 개요이다. 95년도 현재 이 프로그램을 통하여 매년 장기(1년) 교환유학생 14명, 단기(2개월) 19명을 각 대학에 파견하고, 거의 같은 수의 교환 유학생을 자매학교로부터 받아들이고 있다. 이와같은 유럽 또는 아시아에 개방된 본교 국제교류 프로그램은 파견학생수와 그 지역적 광범위성에 있어, 국제화시대에 어울리는 충실한 내용을 갖추고 추진되어왔다고 말해도 좋을 것이다. (도표참조)

그런데, 이와같은 세계각국 대학과 학생을 중심으로 한 사람들에 왕래는 보통 생각되어지는 화려한 이미지와는 대조적으로, 한 걸음 한 걸음 충실히 그러나 조용하게 젊은이들간의 국제이해의 싹을 키우고 있는 것으로 비춰지고 있다. 무엇보다도 같은 캠퍼스에 각국에서 온 유학생들이 왕래하는 모습을 보기도 전혀 위화감이 없이 자연스럽게 보는 것은, 우리들 자신의 심리적 벽이 없어지고 있다고 말해도 좋을 것이다. 또한 실제로 언어, 사고, 행동양식의 차이를 넘어 커뮤니케이션의 폭도 조금씩 넓어지고 있다.

그러나 교류를 통해 태어난 국제이해의 싹이 큰 열매로 커가기 위해서는 학생파견이나 받아들이는 사람의 수에서 보여지는 것 같은 양적확대만이 아니라, 앞으로는 일반학생을 포함한 수준에서 풀뿌리의 교류를 더욱 충실히 행해 나갈 필요가 있다고 하겠다. 그런 의미에서 본교의 국제교류는 아직 막 발을 딛은 단계이며, 다음의 단계를 향한 다시 한번의 비약이 기대되고 있다.

1995년도 국제교류 프로그램

月	미국·몬타나	韓國·大田	中國·深川	英國·리버풀	프랑스·리옹	독일·루도비히스하혼	미국·산안토니오
4月							
5月	몬타나 研修團 來學(5月中旬~6月中旬)						
6月							
7月		夏期研修團 來學(7月中旬~8月中旬)					
8月	交換教員出發(~다음해 7月 交換留學生 出發 몬타나州立大學에 3名, 캐롤大學에 2名~다음해 5月)	大田大學校訪問學生研修團 出發(8月末~9月初旬)					認定留學生 出發(~다음해 8月)
9月	交換教員 및 交換留學生 來學(~다음해 7月)		深川大學訪問學生研修團 出發(9月中旬)	交換留學生 2名 出發(~다음해 7月) 交換留學生 2名 來學(~다음해 7월)	交換留學生 1名 出發(~다음해 6월)	交換留學生 4名 來學(~다음해 2월)	산안토니오市 派遣留學生 來學(~다음해 7월)
10月							
11月							
12月							
1月							
2月	短期留學生 3名 出發(몬타나州立大學에 2월 初旬~3월 末日)	大田大學校學生研修團 來學 交換教員 및 交換留學生 2名 出發(~다음해 2월)	交換留學生 2名 出發(~다음해 2월)	短期留學生 8名 出發(2월 初旬~3월 末)		短期留學生 8名 出發(2월 初旬~3월 末)	
3月		交換教員 및 交換留學生 4名 來學(~다음해 2월)	交換留學生 2名 來學(~다음해 3월)	交換留學生 4名 來學(~8월)			

熊本学园大学国际交流现状

国际交流委员长 胜部伸夫

熊本学园大学同海外大学的友好交流已经进行了十多年了。

继一开始同美国蒙大拿州的蒙大拿州立大学、蒙大拿大学、卡罗大学等校的交流之后，进而又延伸到亚洲地区，先后同韩国的大田大学校和中国的深圳大学建立了友好交流关系。每年或者隔年，我们都同这些大学互派教师和学生，硕果累累。

最近，我校又将学生交流的计划扩大到欧洲各大学，先后同英国的利物浦·约翰·摩尔斯大学、法国的里昂商科大学、德国的莱法州州立专科学校之间，建立了长期或短期的学生交流。

另外，熊本市同美国圣安东尼奥市是友好城市，每年都选拔交换大学生去堪萨斯州的湖水圣母大学和印加奈特伍德大学学习。我校通过这一关系，也积极推荐学生参加选拔。我校还同美国、韩国的各大学互派学生研修团，从95年度起，初次派往中国的研修团也已在计划之中。

以上是迄今为止本校国际交流的历史及概要。截止到95年底的现在，我校每年已派遣了长期(一年)交换留学生14名、短期(两个月)的19名。与此同时我们还迎来了差不多同等数量的交换留学生。象我校这样通过欧美与亚洲并重的国际交流计划，来向海外广大地区派遣这么多的学生，不论从形式上还是在内容上，都充分体现了国际化时代的精神。

(参见图表)

在以学生为中心而展开的同世界各国大学的友好交流中，除了那些显而易见的活动与形式之外，更重要的是，大家超越语言、思考和行动方式的不同，努力通过会话来一点一点地扩大了交际之环：青年人的国际理解意识之芽也在不知不觉中，一步一步地得到培育和成长。在校园中，我们对来来往往的各国留学生已经习以为常，并且对他们不再有那种外来者之感，这就说明我们已经开始克服心理上的障碍，向世界敞开了心扉。

为了使通过友好交流而诞生的国际理解意识之芽更加茁壮成长并且结出丰硕成果，我们不仅要进一步扩大学生派遣和接受的人数，还要切实促进包括一般学生在内的广泛的基础交流。从这个意义上讲，我校的国际交流还仅仅是个开端，还要大家共同努力，将我校的国际交流推向一个新阶段。

1995年度国际交流计划

月	美国·蒙大拿	韩国·大田	中国·深圳	英国·利物浦	法国·里昂	德国·莱法州	美国·圣安东尼奥
4月							
5月	蒙大拿研修团 来校(5月中旬 ~6月中旬)						
6月							
7月		暑期研修团来 校(7月中旬~ 8月中旬)					
8月	交换教员出发 (~翌年7月交 换留学生出 发,赴蒙大拿 州立大学3名、 卡罗大学2名、 ~翌年5月)	赴大田大学访 问学生研修团 出发(8月末~ 9月上旬)					认定留学生出 发(~翌年8月)
9月	交换教员和交 换留学生来校 (~翌年7月)		赴深圳大学访 问学生研修团 出发(9月中 旬)	交换留学生2 名出发(~翌 年7月) 交换留学生2 名来校(~翌 年7月)	交换留学生1 名出发(~翌 年6月)	交换留学生4 名来(~翌年2 月)	圣安东尼奥市 公派留学生来 校(~翌年7月)
10月							
11月							
12月							
1月							
2月	短期留学生3 名出发(赴蒙 大拿州立大学 2月上旬~3月 末)	大田大学学生 研修团来校、 交换教员和交 换留学生2名 出发(~翌年2 月)	交换留学生2 名出发(~翌 年2月)	短期留学生8 名出发(2月上 旬~3月末)		短期留学生8 名出发(2月上 旬~3月末)	
3月		交换教员和交 换留学生4名 来校(~翌年2 月)	交换留学生2 名来校(~翌 年3月)	交换留学生4 名来校(~8 月)			

Situation Actuelle des Echanges Internationaux à l'Université de GAKUEN KUMAMOTO.

Directeur des Echanges Internationaux,
Nobuo KATSUBE.

Cela fait déjà plus de 10 ans qu'à l'Université de GAKUEN KUMAMOTO nous avons commencé notre programme d'échanges avec des universités étrangères. Cela a débuté avec les facultés de commerce de l'État du Montana, aux États-Unis (Université d'État du Montana, Université du Montana, Université de Carroll), pour s'étendre ensuite aux Universités de Taejon, en Corée, et de Shenzhen, en Chine, toutes deux étant nos universités jumelles en Asie.

Les échanges mutuels de professeurs et d'étudiants avec ces universités s'effectuent de manière très active, soit tous les ans, soit tous les deux ans, et nous commençons à obtenir de très bons résultats. Enfin, le programme d'échange d'étudiants s'est étendu aux facultés de commerce d'Europe (l'Université de Liverpool John Moores, en Angleterre, l'École Supérieure de Commerce de Lyon, en France, l'Université d'Économie de l'État de Rhénanie-palatinat, à Fachhochschule, en Allemagne), avec lesquelles nous avons des programmes, courts ou longs, d'échanges d'étudiants. De même, à partir du jumelage de Kumamoto avec la ville de San Antonio, aux États-Unis, nous réalisons, via une sélection qui s'effectue aux niveaux municipaux, des échanges d'étudiants avec deux établissements, l'Université de l'État du Texas de Incarnate Word, et l'Université de Our Lady Of The Lake. De plus, avec les universités américaines et coréennes, nous nous envoyons mutuellement des groupes d'étudiants en stages, et devrions réaliser la même chose avec les universités chinoises à partir de l'année scolaire 1995-96.

Voilà, brièvement, où nous en sommes pour notre programme d'échanges. Nous enverrons, en 1995, 14 personnes en programme long (1 an), et 19 en programme court (2 mois), et en recevrons à peu près le même nombre de nos universités soeurs. De cette manière, on peut dire que, en cette période d'internationalisation, notre programme d'échanges internationaux avec l'Europe et l'Asie est convenablement rempli quant au nombre d'étudiants que nous envoyons, ainsi que pour le développement de notre région (Voir tableau ci-après).

En conséquence, et parallèlement à l'image apparemment magnifique qu'ont les échanges internationaux, il semble que ce sont ces personnes, au centre même de ces va-et-vient avec les universités de tous ces pays, qui font petit à petit bourgeonner la compréhension par les jeunes de l'internationalisation. Tout d'abord, il n'y a absolument plus de sentiment de dysharmonie dû au fait de voir des étudiants de diverses nationalités qui vont et viennent sur le même campus. Que cela devienne quelque chose de naturel signifie que, pour nous, une barrière psychologique est en train de disparaître. Cela veut aussi dire en fait que, progressivement, le cercle de communication, surmontant les différences de langues, de pensées et de styles de vie, est en train de s'agrandir. Toutefois, afin que le fruit né du bourgeon de la compréhension internationale qui est apparu au cours de ces échanges mûrisse pleinement, il est important de ne pas se contenter d'augmenter le nombre d'étudiants que l'on envoie ou que l'on recoit, mais il faut aussi l'enrichir d'étudiants ordinaires, tels les brins d'herbe qui poussent autour de l'arbre. Vus sous cet angle, les échanges internationaux de cette université ne représentent qu'une petite parcelle de l'essor que nous espérons réaliser dans l'avenir.

Programme des Echanges Internationaux Pour l'Année 1995-96.

Mois	États-Unis Montana	Corée Taejon	Chine Shenzhen	Angleterre Liverpool	France Lyon	Allemagne Ludwigshafen	États-Unis San Antonio
Avr.							
Mai	Venue d'un groupe de stagiaires du Montana (de mi-mai à mi-juin).						
Juin							
Juil.		Venue d'un groupe de stagiaires en stage d'été (de mi-juillet à mi-août).					
Août	Envoi d'un groupe de professeurs (jusqu'à juillet de l'année suivante) et d'étudiants (3 à l'Université d'État du Montana et 2 à l'Université de Carroll jusqu'en mai de l'année suivante) dans le cadre d'un échange.	Envoi d'un groupe d'étudiants stagiaires en visite à l'université de Taejon (de fin août a début septembre).					Envoi d'étudiants avec reconnaissance des unités de valeur par notre université.
Sept.	Envoi d'un groupe de professeurs et d'étudiants dans le cadre d'un échange (jusqu'en juillet de l'année suivante).		Envoi d'un groupe d'étudiants stagiaires en visite à l'université de Shenzhen (à partir de mi-septembre).	Envoi de 2 étudiants et venue de 2 autres dans le cadre d'un échange (jusqu'en juillet de l'année suivante).	Envoi d'l étudiant dans le cadre d'un échange (jusqu'en juin de l'année suivante).	Venue de 4 étudiants dans le cadre d'un échange (jusqu'en février de l'année suivante).	Venue d' étudiants envoyés par la ville de San Antonio(jusqu'en juillet de l'année suivante).
Oct.							
Nov.							
Déc.							
Jan.							
Févr.	Envoi de 3 étudiants en séjour court à l'université d'État du Montana (du début février à fin mars).	Venue d'l groupe d'étudiants stagiaires de l'université de Taejon. Envoi d'l professeur et de 2 étudiants dans le cadre d'un échange (jusqu'en février de l'année suivante).	Envoi de 2 étudiants dans le cadre d'un échange (jusqu'en février de l'année suivante).	Envoi de 8 étudiants en séjour court (du début février à fin mars).		Envoi de 8 étudiants en séjour court (du début février à fin mars).	
Mars		Venue d'l professeur et de 4 étudiants dans le cadre d'un échange (jusqu'en février de l'année suivante).	Venue de 2 étudiants dans le cadre d'un échange (jusqu'en mars de l'année suivante).	Venue de 2 étudiants dans le cadre d'un échange (jusqu'en août de l'année suivante).			

Der derzeitige Stand der internationalen Austauschbeziehungen an der Kumamoto Gakuen Universität

**von Nobuo Katsube,
Leiter des Zentrums für internationalen Austausch**

Es sind nun schon reichlich 10 Jahre vergangen, seit die Kumamoto Gakuen Universität zum ersten Mal Austauschbeziehungen zu ausländischen Universitäten aufgenommen hat. Das waren am Anfang die Partnerschaftsbeziehungen zur Montana State University, zur Montana University und zum Carroll College im US-Bundesstaat Montana, welche später auch auf asiatische Universitäten, wie die Taejon-Universität in Südkorea und die Shenzhen-Universität in China erweitert wurden. Mit diesen Universitäten findet jährlich bzw. alle 2 Jahre ein sehr erfolgreicher Austausch von Dozenten und Studenten statt. In der Folgezeit erweiterten wir unser Studentenaustauschprogramm auch auf verschiedene Universitäten in Europa; wir haben länger- und kürzerfristigen Studentenaustausch mit der John-Moorse-University in Liverpool/England, mit der Handelshochschule Lyon in Frankreich und mit der Fachhochschule Rheinland-Pfalz in Deutschland. Auf Grund der Partnerstadtbeziehungen Kumamotos zu San Antonio in Texas/USA findet ausserdem auch ein Studentenaustausch mit dem Incarnate Word College und der Our Lady of the Lake University in Texas statt, wobei die Teilnehmer von der jeweiligen Stadt ausgewählt werden. Auch haben wir einen Austausch von Studiengruppen mit allen genannten Universitäten in den USA und Korea, und für 1995 ist erstmalig geplant, eine Studiengruppe nach China zu schicken. Soweit ein kurzer Abriss zur Geschichte des internationalen Austausches an unserer Universität.

Im Zuge dieses Austauschprogrammes werden in diesem Jahr (1995) 14 Studenten langfristig (für 1 Jahr) und 19 Studenten kurzfristig (für 2 Monate) an die verschiedenen oben genannten Universitäten zum Studium geschickt, und etwa die gleiche Anzahl Studenten kommt von den Partneruniversitäten zu uns. So kann man wohl zu recht behaupten, dass das internationale Programm unserer Universität, welches sich schon jetzt über Asien nach Amerika und Europa erstreckt und auch weiterhin sowohl regional als auch von den Teilnehmerzahlen her erweitert wird, das Zeitalter des Internationalismus mit lebendigem Inhalt erfüllt. (siehe Tabelle)

Es scheint, dass durch diesen Studentenaustausch der Universitäten all der verschiedenen Länder Schritt für Schritt, ganz leise unter den jungen Menschen ein internationales Verständnis keimt und wächst. Von besonderer Bedeutung ist dabei, dass wir inzwischen völlig natürlich mit der Tatsache umgehen, dass ausländische Studenten auf unserem Campus kommen und gehen, dass die Hemmschwelle von unserer Seite überwunden ist. Und tatsächlich scheint es, dass sich die Kommunikation über alle Unterschiede der Sprache, des Denkens und der Lebensweise hinweg immer mehr verbreitert. Um diesen aus dem Studentenaustausch geborenen Keim des internationalen Verständnisses jedoch noch wachsen zu lassen, genügt es nicht, einfach die Teilnehmerzahlen des Austauschprogrammes zu erhöhen. Es ist wichtig, auf breiter Ebene bei allen Studenten dieses Verständnis zu vertiefen.

In diesem Sinne stehen wir erst am Anfang, und wir wünschen uns, dass uns die nächsten Schritte ein weiteres Stück auf diesem Wege voranbringen werden.

Das internationale Austauschprogramm für das Studienjahr 1995/1996

Monat	USA/Montana	Korea/Taejon	China/Shenzhen	England/Liverpool	Frankreich/Lyon	Deutschland/Rheinld.-Pfalz	USA/San Antonio
April Mai	Ankunft der Studiengruppe aus Montana (Aufenthalt Mitte Mai bis Mitte Juni)						
Juni Juli		Ankunft der Sommerstudiengruppe (Mitte Juli-Mitte August)					
August	Abreise der Austauschdoz. (bis Juli 1996), Abreise der Austauschstud. (3 an die Montana State, 2 an die Carroll, bis Mai 1996)	Abreise der Gastdelegation an die Taejon (Ende Aug. bis Anfang Sept.)					Abreise der Austauschstudenten
Septemb.	Ankunft der Gastdozenten und -studenten (bis Juli 1996)		Abreise der Studenten-delegation nach Shenzhen (Mitte Sept.)	Abreise und Ankunft von jeweils 2 Austauschstudenten (bis Juli 1996)	Abreise eines Austauschstud. (bis Juni 1996)	Ankunft von 4 Austauschstudenten (bis Februar 1996)	Ankunft der Austauschstud. aus San Antonio (bis Juli 1996)
Oktober November Dezember Januar							
Februar	Abreise der Austauschstudenten (kurzfristig, Anfang Februar-Ende März) an die Montana State University	Ankunft einer Studiengruppe von der Taejon Universität Abreise von 2 Austauschstudenten bzw. -dozenten (bis Februar 1997)	Abreise von 2 Austauschstudenten (bis Februar 1997)	Abreise von 8 Austauschstudenten (kurzfristig, von Anfang Februar bis Ende März)		Abreise von 8 Austauschstudenten (kurzfristig, Anfang Februar - Ende März)	
März		Ankunft von 4 Austauschdozenten bzw. -studenten (bis Februar 1997)	Ankunft von 2 Austauschstudenten (bis März 1997)	Ankunft von 4 Austauschstudenten (bis August)			

外国人留学生弁論大会の審査を終えて

熊本学園大学教授 尾崎 勇

国際交流委員会から、11月某日、審査の依頼があったとき私は「外国語で喋られるのですか」と聞きかえした。英語はおろか中国語、韓国語にまったく心得がなかったからだ。「日本語の語学力をたかめることと日本人学生との親睦が目的です」との答えが返ってきたので内心ほっとした。しかし、審査だけではなく大会の最後に講評もするはめになった。いささか荷がおもかったが、お引き受けすることにした。ここに述べることは、大会に出席した折りの感想と講評の一部である。

11月26日、午後1時から開始されたが、会場には外部から審査員として熊本県庁、ライオンズクラブ、銀行の役職にある方をはじめ報道関係者も混じる中で16名の留学生が熱弁をふるった。予定人員10名をはるかに上回る充実した大会となった。現在、熊本学園大学には98名の外国人留学生が在籍しているから比率のうえからみても、留学生の考え方を具体的に伺うことができた。日本での印象、母国との比較、チクリ日本批判、日本に来てからの習慣の違いによる困惑をはじめとして種々様々であった。弁論技術も優劣を付けがたいほど巧みであったので、誰を入賞させるべ

きかたいへん迷った。結局、「誤解」を発表した王念海さんが最優秀賞に輝いた。日本でのこれまでの体験をもとに、母国との間にある溝をいかにうずめるかを真剣に語った。現在もなお国家間での紛争が絶えない理由のなかに意志の疎通がうまくいかず、「誤解」している場合が多いことを結びの言葉にした。切実な問題提起をしていると思われる。そして、「異文化交流の中に「和」の生き方に立つ」を論題にした楊軍さんは「和」の語源の解説を導入部にあて、それぞれの国が固有の文化を発展させていく必要を説き、「和」の精神で協力していこうと力強く訴えていた。この「和」から日本人の誰もが、すぐ連想するのは、日本がまだ国家として対外的に立ち遅れて、東アジアの国々から先進の文化を吸収することに努めていた頃に、聖徳太子が十七条憲法のなかに「和をもって貴しとなす」という条文をいれた歴史事実であろう。時を隔てて、「和」の精神が日本人でなく外国人留学生から唱えられたことに意義を感じる。地球社会に入った現代にこそ「和」の精神は国々のあいだで吹聴されねばならないことはいままでもない。

紙面もつきてしまったので、付言しておきたいことは、この弁論大会が4回目をむかえて盛会のうちに終わったのは国際交流委員会の人をはじめ関係各位の尽力によるものである。5回、6回と回をかさねるにつれて、より多くの日本人学生が参加して親睦を深めながら真に国際人として活躍できる素地を培って欲しいことである。

第4回外国人留学生弁論大会 出場者一覧

氏名	国籍	所属	弁論テーマ	受賞
王念海 オウネンカイ	中国	商学部経営学科学部研究留学生	『誤解』	最優秀賞
庄东燕 ジュエウドンイェン	中国	商学部経営学科4年 (深圳大学交換留学生)	『異文化を理解する上に 異文化に溶け込む』	優秀賞
張蓉霞 ジャンロンシア	中国	商学部経営学科4年 (深圳大学交換留学生)	『国際的な若者になろう』	特別賞
Susan Allen スーザン・アレン	オーストラリア	経済学部国際経済学科3年	『マンガ大国－日本』	優秀賞
林木鳳 リンモクホウ	中国	商学部商学科3年	『国際結婚問題から 私が思うこと』	特別賞
Kerrie Waring ケリー・ウェアリング	イギリス	商学部経営学科3年 (リバプール・ジョン・モーズ大学交換留学生)	『小さい世界です』	努力賞
Sandra Kelly サンドラ・ケリー	アイルランド	経済学部国際経済学科3年 (リバプール・ジョン・モーズ大学交換留学生)	『美しくてちょっと 心配なアイルランド』	特別賞
Patrick Keane パトリック・キーン	アメリカ	経済学部国際経済学科4年 (キャロル大学交換留学生)	『変わらないで下さい』	努力賞
David Grant デイビッド・グラント	アメリカ	経済学部国際経済学科4年 (モンタナ州立大学交換留学生)	『わたしはラッコ』	努力賞
Simon Thomsen シモーネ・トムセン	ドイツ	商学部経営学科3年 (ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生)	『日本舞踊との出会い』	特別賞
Stefan Treier シュテファン・トライアー	ドイツ	商学部商学科3年 (ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生)	『私の夢』	努力賞
Carolina Ballester カロリーナ・バイエステル	スペイン	経済学部国際経済科目等履修生 (インカーネットワード大学交換留学生)	『温泉を輸出しましょう』	特別賞
Gregor Schmalz グレゴア・シュマルツ	ドイツ	経済学部経済学科3年 (ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生)	『わたしたちはみな同じ人間』	努力賞
Clemens Siegfanz クレメンス・ジエグファーツ	ドイツ	経済学部国際経済科3年 (ラインランド・プファルツ州立経済大学交換留学生)	『どうして日本』	努力賞
権奇雲 クオンキウン	韓国	商学部経営学科3年	『倶楽部活動を 通じて学んだこと』	特別賞
楊軍 ヨウグン	中国	商学部経営学科2年	『異文化交流の中に 「和」の生き方に立つ』	特別賞

交換教員往来



1994年夏から堀正広助教授(英語、文体論)が1994年度四大学間交流プログラム交換教員として現在、米国・モンタナ州立大学へ赴任中。1年間の滞在予定である。



9月には、その米国・モンタナ州立大学よりリチャード・ロッシュ先生(農学実験研究所データシステム研究助手)が来学。1年間の滞在予定で英語講座を担当いただいている。



1995年2月下旬から、韓国・大田大学校へ木下徹弘講師(管理会計)が第8回交換教員として赴任。滞在予定期間は1年間。



同じく2月下旬から、新立義文教授(学校保健)が第3回交換教員として中国・深圳大学に赴任。滞在予定期間は半年間。



3月中旬には、韓国・大田大学校より第11回交換教員の尹一鉉副教授(国際貿易)が来学された。1年間の予定で韓国語を担当いただく。



3月下旬には、中国・深圳大学より第6回交換教員の王洋講師(日本語)が来学された。半年間の予定で中国語を担当いただく。

交換教員プログラムの概要

●モンタナ州立大学へ

開始年：1984年より隔年おきのプログラムとして開始。その後、1988年に『四大学間交流プログラム』として毎年の交換プログラムへ移行。

応募資格：熊本学園大学の専任教員

主な条件：1. 日本語の講義を担当する。
2. 派遣費用を支給する。(宿舍は受入大学が用意する。)

●大田大学校へ

開始年：1986年より受入開始、派遣も翌87年に開始。毎年のプログラム。

応募資格：熊本学園大学の専任教員

主な条件：1. 日本語の講義を担当する。
2. 派遣費用を支給する。
(生活費及び宿舍、医療保険等は受入大学が用意する。)

●深圳大学へ

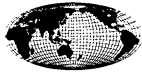
開始年：1989年に受入開始。派遣も翌90年に開始。隔年おきのプログラム。

応募資格：熊本学園大学の専任教員

主な条件：1. 日本語の講義を担当する。
2. 派遣費用を支給する。
(生活費及び宿舍、医療保険等は受入大学が用意する。)

1994年 研修団往来

研修団名(受入)	来学期間	引率人数	来学者数
大韓民国第3次大学生海外研修団	1月14日	3名	38名
甲南大学外国人学生研修団	4/21~23日	5名	22名
大田大学校経営行政大学院研修団	7月5日	2名	30名
JALスカラシップ留学生	7/30~31	5名	15名
韓国光州直轄市公務員教育院	11月1日	2名	19名
第5回韓国元日本留学者の集い	11月17日	2名	16名
研修団名(派遣)	派遣期間	引率人数	参加学生数
国際経済学科「外国事情研修」米国班	7/15~8/15	3名	118名
” ” 韓国班	7/18~8/15	1名	29名
” ” 中国班	7/25~8/25	1名	40名
モンタナ研修団	8/24~9/12	2名	20名
大田大学校訪問学生研修団	8/31~9/6	3名	29名



まだ心に残っている熊本の人の親切

大田大学校副教授 尹 光 鳳

私が初めて学校を訪問したのは93年3月17日であった。迎えに出た物静かな西村さんと親切な切通さんの案内で空港からアパートに落ち着いた後、出直して学校に行った。その時の熊本学園の初印象は規模が小さく静かなところだった。

その後、続けて学校の事情について色々と説明をする二人の親切は今でも強く心に残っている。真の国際交流はこのような人々の努力によって支えられていくのだろう。少しでも不便のない学校生活をするために助けてあげようとするその様子に日本人の親切を感じることができた。

学校は小さいけれども、学校運営は非常に素晴らしそうだった。まず何よりも一糸乱れず動く行政体系である。度々の教員の会議、学生たちの多様な趣味活動、そしてゼミ形式の授業運営、授業の準備のために使用する複写設備、また120余名の外国留学生たちの活気に満ちた様子など、みなすべてのものは私にとって「ちいさい巨人」に見えた。

しかし、学生たちについて、個人的アルバイトのために始めの時間から眠っている学生たちとか、あるいは私の授業を受けている学生であるにも拘らず、校庭で挨拶をしない学生をみかけたのは惜しいことであった。だがこれはもちろん、ごく一部分にすぎない。

最近では日本が経済大国へと変化後、ヨーロッパ化する傾向が強い。それでとなりのアジアの国に対して疎略にする気持ちがあった。特にイギリスやアメリカに対する様子は度が過ぎる印象がする。これは日本が既に世界国家に変身した故に、なにかできると思っている。

93年の夏は非常に蒸暑く、退屈な梅雨の連続であった。5月中旬から降り始めた雨は10月まで続いてしまった、そして時々心までが曇った。大抵の人々は習慣が身につくのでこんな天気に対してよく対処できているようだった。郷里のなかでも私が住んでいた水前寺は忘れられないところであった。日本の伝統的な古風さをとどめる凝った家々が



国際交流センターで

並んでいる小路を歩くのは本当に楽しいことであった。肥後の庭園に色とりどりの花が四季に咲き続けるのをみながら素朴な熊本人の心を読むことができた。

最後に力不足な私のハングルの講義を聞くために熱心に参加した教職員に感謝したい。短い時間であったけれども、とても愉快で楽しい時間であった。とにかく熊本学園の一年間の滞在は私にとって忘れられない経験である。

[1993年3月～1994年2月 本学滞任]

熊本の印象—オアシス—

深圳大学助教授 郭 来 舜

半年も熊本に滞在して、熊本学園大学で教鞭を執った。半年の時間はそれほど長くはないが、皆様のお蔭で、小生はいろいろな所を見学させていただいて、長年の願いがやっと叶ったのである。熊本滞在中一番印象的なのはなんであるかと良く聞かれるが、考えてみれば、次の四つが有ると思う。

おいしい水。深圳に帰ってまず慣れなくなったのはなによりも水と言うものである。蛇口を開けて流れてきた水は変な匂いがプーンと嗅いでくる。生水は勿論飲めない。仕方がなくて、水道水をまず一度フィルターに掛けて、ガスで沸かして、それからお茶を入れるようにしている。その時、また一度白くの水を飲みたいなーいつも思っている。

アツい人情。路をたずねる時、いつも親切に教えてくれた、名前さえ知らない熊本の市民。会うたびにいていねいに挨拶してくれるマンションのお爺さん。何回も海釣りに案内してくれた永末先生と小幡さん、及びその釣った魚を美味しく料理してくれた永末先生の奥様。玉家亭で四川料理を招待してくれた西先生。いろいろ優しくつきあってくれた田島先生。永井先生と鴛先生をはじめとする中国語クラスの皆様。なによりも毎日お世話になった国際交流室の古田先生と勝部先生と星子さんと西村さん、及びお嬢さんの皆様。星子さんが紹介してくれた三味線のお婆さんも一生忘れられない人物である。……熊本の人情は厚くて、長くて、とても一枚の紙に記すことのできないものである。思い出すと、いつも胸いっぱい。

シゼンが素晴らしい。雄大な阿蘇山、神秘的な大渓谷、広々とした天草、そびえ立つ熊本城……何回見ても絶対厭きることはない。

すぐれた人材が輩出する。商大の同窓会に一度参加させていただいた。熊本各界の要人を紹介されて、殆ど商大の卒業生だということが分かって、本当にびっくりした。

熊本の皆様よ！オアシスの熊本をいつまでも、いつまでも大切にしてください。再会の目を楽しみにしています。お元気で。

[1993年9月～1994年3月 本学滞任]

My Year in Kumamoto

My year as the exchange professor to Kumamoto from Montana was a very full one. I met and worked with many people who touched and changed my life in many ways. The following are some highlights of my year in Kumamoto in no particular order.

Professor Hori kindly introduced me to life at his zen dojo. I participated in six or seven retreats and different zen activities. Professor Hori is now in Bozeman and I took him to our meditation group here, which is much more informal than his dojo. Also I took his whole family country dancing with an old time band. Professor Hori looked like a Montana cowboy with cowboy hat and clothes on.

As an artist I was very interested in Japanese art techniques and I was fortunate to have some valuable dialogue with several Japanese artists. Most important were my conversations with Professor Haruguchi. Paradoxically, his knowledge in the European technique of egg tempera mixed with oil paint has had a major impact on my paintings. Since my return to Bozeman I have used this technique extensively in preparing for my next show in Colorado in February. I also worked with Nakagawa-san learning mokuhanga which I will teach here in Bozeman next year.

Outside of art I have many memories of life at Kumamoto Gakuen University and my colleagues and students there. After a year of teaching English I have nothing but respect for this profession. It is a very complex and challenging field.

I greatly enjoyed the people who worked in the International Office. Especially the cherry viewing party at the castle drinking sake and eating sushi. I wish I could join you for this year's cherry blossoms.

Last, I would like to mention my Japanese teacher Mrs. Fukuyama who had the hardest job of anyone in trying to teach me Japanese. Her patience and generosity were wonderful and she taught me so much about the Japanese culture.

All my best to everyone.

[1993年9月～1994年8月 本学滞在]



熊本での個展会場で



交換教員送別会の席で

MSUへの留学を終えて

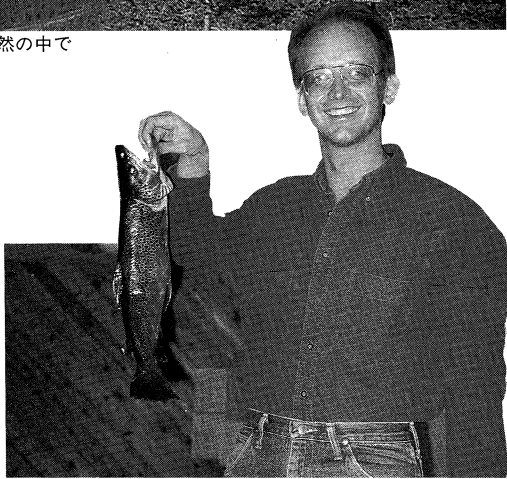
熊本学園大学講師 カーク・マスデン

本学からの交換教員として1994年の春学期に、モンタナ州立大学 (MSU) で日本語を教えて参りました。アメリカ人である私が日本の大学の代表としてモンタナに赴いたことを不思議に思った方は太平洋の両側にいらしたと思います。しかし、この異例の留学にそれなりの意義があったと思います。

例えば、「日本から派遣されたアメリカ人」という立場は、交渉する際好都合でした。というのは、ある時は本学側に立って「我々」の見解を説き、ある時は同胞のアメリカ人として熊本学園大学の「彼等」のことを説明する、といったように事情やテーマに合わせて立場を選ぶことができました。交換教員はふつう「交渉」するようなことはまったく必要ありませんが、立場上私ならしやすすいだろうと思ひ、交換教員の研究室、研究条件など、気になったことをめぐって少し交渉してみました。幸いにMSU側の理解を得ることができ、かなり改善していただきました。



モンタナの大自然の中で



この留学をするまで、私はモンタナに行ったことがありませんでした。初めての体験が多く、さまざまな意味で私にとって有益な留学だったと思います。アメリカ人である私でさえそうだったので、日本人の教員なら、きっと一層有益な留学になるだろうと思います。しかし、これまでは、この留学を希望する先生は決して多くなかったようです。これはきっとMSUの良さの認識不足によることだろうと思いますので、ここで私なりにMSUへの留学のメリットをまとめてみたいと思います。

まず、モンタナの自然の美しさが大きなメリットとして挙げられます。特に家族で赴くと良いと思います。私の留学が決まってから、妻は熊大に赴任するチャンスに恵まれたので、結局単身で行くことになりました。妻が職を得たことは幸いでしたが、家族揃ってモンタナの大自然を満喫できなかったのは残念です。アパートは大学の大きなグラウンドに面して、山に囲まれています。交換教員の家族はその広いグラウンドをわが家の庭のように利用できるのです。こどもにとっては素晴らしい環境だと思います。私は単身で思う存分には楽しめませんでしたが、何回かスキーに行ったり、魚釣りしたりしました。

次のメリットとして研究条件の良さがあります。特に、MSUの図書館はCD-ROMなどのデータ・ベースが充実していますので、自分の研究テーマに合った論文を検索する

ことが容易にできます。その文献が図書館になくても、interlibrary loan というサービスで入手できます。

最後に、モンタナという「アメリカの片田舎」でも、以外と日本からの情報などが簡単に手に入ります。私は『羅府新報』という日本語の新聞を毎日、郵便で送ってもらいました。一年間の定期講読料金は何と6,000円程度。この他、大学に衛星放送の設備があり、毎日日本のニュースを日本語で見ることができました。また、米、味噌、豆腐など日本料理に必要な主な材料をスーパーで買えます。

今後多くの教員がこのすばらしい機会を利用することをお祈りします。

(1994年1月～1994年8月 モンタナ州立大学滞在)

大田大学の学生たち

熊本学園大学教授 嵯峨一郎

日本では、こんな言い方をよく耳にする。

「日本の学生が勉強しないのは、受験競争が激しすぎて、大学に入った頃には燃え尽きてしまっているからだ」。

しかし、私は、韓国の学生たちを見て、この言い方は間違っていると思うようになった。韓国でも、受験競争はすさまじいのである。高校は深夜まで補習をやり、「学院」と呼ばれる予備校があちこちにある。特にソウル市の有名大学に入るためには、高額な謝礼を出して家庭教師を呼ばなければならないから、親の負担も大変である。韓国の学生こそ“燃え尽き症候群”になって当然と思うのだが、しかし日本の学生と比べて、どう見ても表情や態度がはつきりしているのである。最近読んだ本によると、日本の学生の6割程度は競争を避けるために大学に入ってきた層らしいが、大田大学校ではそうした退行現象は感じられなかった。日本の大学の問題は、思ったより根が深いのかも知れない。



大田大学校・社会科学研究所主催のシンポジウムで講演する筆者

それにしても、授業は楽しかった。

授業は二クラスで、それぞれ50分授業を二つ続けて行った。初めの頃は私の韓国語がほとんどだめだったので、英語と習いたての韓国語のチャンポンである。何の単語だか忘れたが、私の発音にたいして学生たちが大笑いをする。授業のあとにある学生が来て、「先生の発音では変なスラングの意味になる」と教えてくれた。なお、日本人がよく使う「ちょっと」は、韓国語では男性のアレになるのだから困ってしまう。

私が教室へ行く時、必ずクラスの代表が途中で待っていてくれた。また授業の合い間の10分休憩になると、私は研究室でタバコを一服やるのだが、教室に戻ると教壇の机の上にジュースが置いてあった。また天気の良い日、学生たちの提案で、大学の周辺を皆で歩いたこともあった。「もう少し私に語学力があればなあ」と、いつも思ったものである。

おもしろいことに、教員の研究室に自分の机を運びこんで住みついてしまう学生がかなりいる。私の所にも住みついた学生が一人いて、私が日本語を教えるかわりに私の助手をしてくれるのである。朝行くと、私の机に花が飾ってあったり灰皿がきれいになっていて、とても快適であった。

あの半年間をふりかえって、いやな思い出が一つもない。むろん韓国社会にもむずかしい問題は様々あろうが、韓国は、実に人間味のある社会なのである。

[1994年3月～1994年8月 大田大学校滞任]

熊本・熊本学園大学の思い出

大田大学校教授 洪承 謹

私は1994年3月から1995年2月までの1年間、大田大学校からの交換教授として熊本学園大学にて皆様のお世話になりながら無事に任務を終りました。初めての熊本での来熊の時である3月12日は悪天候の関係で予定時間に熊本空港に降りることができず、航空機は福岡に戻り6時間もおくれで熊本に来る不祥事があって心配でしたが、国際交流室の皆様の温かい歓迎に不安感なく熊本での生活を始めることができました。不安ではあったけれども、私にとっては良い勉強だったし、思い出深い経験でした。

すでに前任交換教授も述べましたが、私も、現代式教育環境、学究的な研究室の雰囲気、静粛な学生の受講態度、などに接しました。また、国際交流センターは外国からの留学生が安心して学べるように温かく親切に迎えてくれるし、大学は非常に民主的に運営されていることを肌で感じました。

熊本学園大学での最初の印象は厳粛な卒業式の光景でした。3月20日、熊本県立劇場コンサートホールでのおごそ



教職員韓国語講座参加者と共に

かな学位記授与式は本当に印象的でありました。私は「ほたるのひかりまどのゆき・・・」を一緒に歌いながら、50年ぶりに、小学校卒業式が思い出されました。また、私もこの学校で韓国語を教えながら日本語を学び、いつかは別れゆくのだなと感じました。

岩野学長は告辞で「今は学歴の時代でなく学習の時代である」と述べました。この時代の若者に適することばであると思いました。およそ、若者としてはいかに学ぶかを、いかに行くかを、そしていかに感じるかを学ぶのです。また、いかにあるべきかも学ばなければならないと思います。卒業式終了後、4号館前学生広場での卒業生を祝う惜別の宴、ブラム・パーティーも非常に印象的でありました。

もうひとつの印象は「水前寺公園ラジオ体操会」です。幸いに私の宿所は水前寺公園から歩いて10分位の所です。毎朝5時には間違いなく散歩に出かけます。公園には100人位の会員（60才以上の老人）が集まって、歩いたり、走ったり、ラジオ体操をしたりしています。また「健康のための宣誓」、ひとつ、生水を飲みましょう…、と誓うのも印象的でした。私はこの体操会でいろんな方々と話し合いながら日本の政治、経済、文化を習いましたし、終戦前後の事情に関するお話も沢山聞くことができました。

日本はおそらく世界中でいちばん治安のいい国であるといわれます。勿論、例外的な事例のあることもたしかですが、一般的には、国民はきちんと税金を払っていますし、伝統や文化が均質に守られているし、教育水準がいちじるしく高いし、階級意識は薄く、「タテ」の人間関係が強力であることなどを深く感じました。

熊本は綺麗な、静かな、一度住んで見たい街でありました。熊本学園大学は、本当に綺麗ながら、静かなながら、21世紀に向かって活気づく、学舎でありました。

一年間にわたり、大変お世話になり、ありがとうございました。

[1994年3月～1995年2月 本学滞任]



モンタナ研修サマープログラム

熊本学園大学助教 朴 哲洙

8月24日午前、熊本学園大学研修団は、モンタナに到着した。カウボーイ帽子をかぶって我々を歓迎するJim Lee先生、熊本の笑顔をして“ようこそMontanaへ！”で学生諸君を安心させる堀先生。小さなボーズマン空港が学園大学の雰囲気になった。泊まる場所はボーズマン市内のメイン・ストリートにあるモーテルで、その周辺はボーズマンの下通りというJim Lee先生の親切な説明もあった。

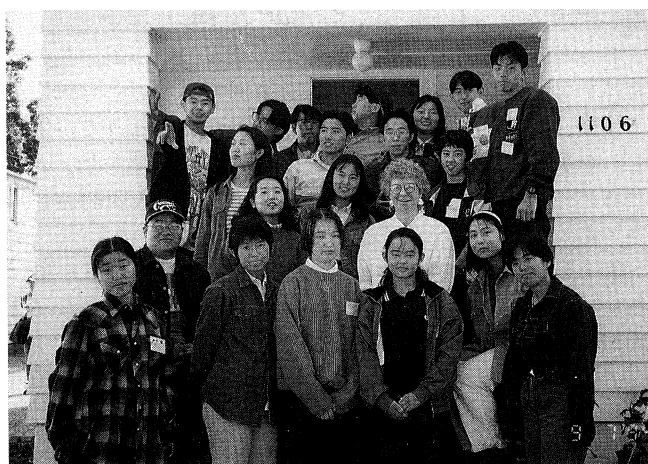
さっそく次の日からアメリカン・ライフ。マイクさんの案内でキャンパスツアー。学生会館SUBの学生達の新学期の忙しい姿を後にして、モンタナの自然との出会いへ。若い自然、Yellowstone National Park、イエローストーンの湖や森、そして目前に迫るCanyon Lodgeの夜星が作るBig Night Skyの感動のため学生諸君の胸がさわぐ。

29日から短期間のモンタナ州立大学ミニ留学体験の始まり。朝早く起きて、バスでキャンパスの食堂まで各自行って朝食を取り、午前中は英会話の集中講義、午後からフィールドワークと各自のリサーチ。

ランチはMSUの学食でMSU学生と一緒に。経営学科の授業参観も一回。自由時間に図書館や、学生会館の本屋や、コーヒーショップに行くことも楽しみ。

姉妹大学であるUniversity of Montana、Carroll Collegeを訪問して、ちょっと違う雰囲気を体験。HelenaのCarroll Collegeを訪問する際、熊本県の「くまもとプラザ」で簡単な説明を受けたことも印象に残る。

二泊のホームステイは学生達には最も感動的だったようだ。ホストファミリーとLabor Dayの休みをエンジョイ。また10年前の本学からの第1回研修団についてのいろいろな話を聞いて、新しい名前「熊本学園大学」になってから最初の研修団であることを記念し、一つの記録としてシャツ



英会話クラスの教室の前で



イエローストーン国立公園にて

を作った。また、学生自身が作った日本料理と出し物でお世話になった方々に感謝の意を表した。また帰路立ち寄ったロスの熊本県人会からの招待歓迎パーティーと在米日本人宅のホームステイも忘れられない。

3週間の異文化の体験を通じて、学生達は新鮮な刺激を受けたようだ。若い時の世界の人々との交流と多様な文化体験は将来の栄養分になる。今回のサマープログラムの成果が学生達の一時期の刺激だけではなく、将来のための栄養分になることを期待したい。

研修日程表

期日	行動内容	宿泊先
8/24水	大学⇒福岡⇒成田⇒ボーズマン	モーテル泊
8/25木	歓迎昼食会、キャンパス見学	
8/26金	イエローストーン国立公園へ出発	イエローストーン泊
8/27土	グランド・キャニオン、間欠泉等見学	
8/28日	ボーズマン着	
8/29月	MSUでの研修（英会話）	モーテル泊
8/30火		
8/31水		
9/1木	ボーズマン⇒ミズーラ、モンタナ大学訪問	モーテル泊
9/2金	グレイシャー公園見学	
9/3土		
9/4日	キャロル大学訪問	ホームステイ宅泊
9/5月	ホストファミリーと終日自由行動	
9/6火	MSU学長主催フェアウェルパーティ	
9/7水	熊本学園大学生によるサンキューパーティ	モーテル泊
9/8木	ボーズマン⇒ロサンゼルス	ホテル泊
9/9金	ロサンゼルスでの研修及び観光	
9/10土	ホストファミリーと終日自由行動	ホームステイ宅泊
9/11日	ロサンゼルス⇒成田	-----（日付変更線通過）-----
9/12月	成田⇒福岡⇒大学	

大田大学校訪問学生研修団

熊本学園大学教授 嗟峨一郎

1994年8月末から1週間、第4回大田大学校訪問学生研修団(学生29名・教職員3名)は、釜山からソウルへ北上する旅を行なった。気候はまだ暑かったが、ほぼ好天に恵まれ、事故もなく、充実した旅を楽しむことができました。

とはいえ一面では、過去の歴史の苛酷さをかいま見てしまう旅でもあった。慶州にある日系婦人保護施設・ナザレ園に行った時、一行の誰もが胸を突き上げられる思いをしたし、独立記念館を見たあとはみんな無口になった。

大田大学校に着いて学生どおしの交流が始まった頃には、雰囲気はグンと明るくなった。学生たちは、たった一晚のホームステイでお互いに親しくなったようだ。弘報国際課の職員の皆さんは、大学バスであちこちを案内して下さるなど、大変親切にいただいた。大田を去る前の晩、“大田のセヌ”を見ながら先生方と一緒に屋台で飲んだソジュは、ことのほか美味しかった。



慶州の仏国寺で



慶州ナザレ園で

ソウル北部の国境線近くに行った時、さすがに緊張に包まれたが、何人かの女子学生が「軍人たちと写真をとりたい」と言う。若い軍人もニコニコして写真におさまった。「不謹慎だ」との声が聞こえそうだが、私はこういうアツケラカンとした光景もいいものだと思う。気が滅入るばかりの旅だったら、やめた方がいい。日本に戻って、「少し疲れた。」という声は聞かれたが、学生たちの表情は実にさわやかだった。

第4回大田大学校訪問学生研修団日程表

期 日	行 程	宿 泊
8/31 (水)	13:30 本学出発 15:30 博多港到着 [大学バス] 17:00 博多港出発 [フェリー]	船上泊
9/1 (木)	8:40 釜山港着 10:00 釜山港発 [バス] 釜山市内見学(チャガルチ市場・釜山タワー) 14:00 慶州到着 [バス] ・仏国寺 ・古墳公園(大陵苑)、天馬塚	[慶州泊] 現代ホテル
9/2 (金)	9:00 慶州ナザレ園訪問 ・石窟庵、国立慶州博物館 午後 慶州出発 [バス] 16:00 大田大学校到着 歓迎式(大学紹介スライド上映)	ホームステイ
9/3 (土)	午前 大田EXPO展示館見学 16:00 展示館見学終了 自由に市内散策 夕食会	[大田泊] 文化観光 ホテル
9/4 (日)	午前 独立記念館見学 [大学バス] 16:00 大田市内散策 18:00 大田大学校主催送別会	[大田泊] 文化観光 ホテル
9/5 (月)	10:00 大田出発 [バス] 午後 ソウル到着 ・景福宮、国立民俗博物館見学 ・南大門市場学等	[ソウル泊] ソウルロイヤルホテル
9/6 (火)	9:00 第3トンネル(非武装地帯) 見学 [バス] 16:30 金浦国際空港到着 18:45 KE734 金浦国際空港発 20:00 福岡空港着 23:00 大学着 [大学バス]	



1994年度国際経済学科 「外国事情研修」を終えて

国際経済学科長 酒井重喜

国際経済学科の外国事情研修も今年で3回目を迎えた。94年度の研修の最大の特徴は二年生を加えたことである。95年度からはこの研修を二年生を主体にしたものにしていくことになっている。94年は過渡期として二年生と三年生の混合部隊ということになった。二年次に下ろした意図は外国経験を早く持ってその後の大学生活に活かしていくことであり、さらに個人による本格的留学をするためのステップとして位置づけたからである。94年度のもう一つの変更点は取得単位をこれまでの「外国事情研修4単位」から「米・中・韓国事情演習4単位および米・中・韓国事情特講2単位」としたことである。「演習」の主な内容は語学学習であり、「特講」では研修国の経済事情・経営事情さらには政治・歴史・文化についての講義からなっている。引率体制は93年とほぼ変わらなかった。アメリカについてはマステン先生に担当して頂き1カ月間とおしてお世話願った。中国は木曾先生に、韓国は丸山先生に研修終了時に研修校へのお礼を兼ねて現地に飛んで頂いた。

95年度の研修の主な変更点は3つである。第一、二年生主体になったことから専門の経済学より語学学習に重点を移す。第二、研修期間を4週間から3週間に短縮し密度の濃い研修をする。ただし3週間の研修でも所定の時間数をこなせるため「演習4単位・特講2単位」はそのまま続ける。第三、研修学生の定員、米・中・韓それぞれ120名・40名・40名のうち20名・10名・10名を経済学科に開放する。これによって当研修は国際経済学科が主体であることには違いないものの経済学科の学生も加わり経済学部全体の取り組みというかたちが変わることになる。予知期間が短かったにも関わらず経済学科の学生が米・中・韓それぞれ9名・5名・1名が申し込み95年度の研修に参加することになった。また95年度のアメリカの引率はルウィン先生にお願いした。韓国の引率は経済学科の木下先生にお願いすることになった。(中国は未定)

1996年度外国語学部「海外研修」に向けて

英米学科長 吉田良夫

英米学科では、本学科の英語教育と異文化理解の実践的完成をめざして、三年次に約4週間の「海外研修」を選択必修として制度化している。英語に実践的にみがきかけることや、現地の政治経済・文化・社会事情の視察、さらに政治・文化・社会に関する講義(英語による)の受講などが主たる内容である。もちろん、研修先の先生方や学生、様々な国からの留学生、また一般の人々との友情の輪が、研修後も続き、グローバルに広がるのが期待されている。

すでに、アメリカはモンタナ州立大学、イギリスはリバプール・ジョン・モーズ大学から受け入れについて了解を得ており、あとは、日程やカリキュラムについて、細部をつめるだけである。本年度の夏休み中に両大学を訪問し、事前の調査と打ち合わせをしようと思っている。

学生諸君の反応も上々で、昨年度実施したアンケートによれば、英米学科定員100名の内、アメリカの希望者が約35名、イギリスが約55名という結果であった。可能なかぎり、学生諸君の希望にそいたいと思っている。なお、来年度のアメリカの引率は米岡ジュリ先生に、英国は神本忠光先生にお願いすることが決定している。

充実したカリキュラムや講義内容を考案することはもちろん教員側の責任であるが、学生諸君においても、英語に磨きをかけたり、訪問国についての知識を増やすなどの事前の準備を自覚的におこなってほしい。



過去3回の「外国事情研修」参加学生及び95年度参加学生数

年度 所属	92年度	93年度	94年度			95年度				
			国経2年	国経3年	計	国経2年	国経3年	経済2年	経済3年	計
米国	106	80	54	64	118	106	12	2	7	127
中国	12	40	6	35	41	17	19	4	1	41
韓国		13	8	21	29	15	1	0	1	17
計	118	133	68	120	188	138	32	6	9	185

東アジア学科の海外研修

東アジア学科長 服部昌之

しゃべらなければ物が買えない、食べられないという場に身を置く、これが会話力をつけるもっともいい方法です。

東アジア学科では、中国コースが北京第二外国語学院へ授業3週、旅行(西安、上海)1週の日程で、韓国コースはソウルの延世大学校延世語学院韓国語学堂の夏期特別課程36日間と旅行3日の日程で海外研修を行う予定にしています。両校ともに研修開始前にクラス編成試験が行われ、

3～4段階のクラスに編入され、また期末には試験が行われ、成績が本人と大学に連絡されることになっています。授業時間は北京は8時から50分授業4回の午前中、ソウルは9時からやはり50分授業4回の13時までで、土・日は休み。市内観光や買物を楽しむ時間はたっぷりあります。北京では週末3回バスで郊外の万里の長城や頤和園などへ行く小旅行を予定していますし、両校とも午後週2～3回、自由参加の書道、絵画、歌などのサークル活動も予定されています。

北京は学内の留学生宿舍2人部屋に入りますが、ソウルでは下宿することになっています。庶民の生活をもろに肌にふれることができると思います。ちがった社会の庶民の暮らしを知ること、これが、語学力の向上とともに海外研修の目的のひとつだと思います。

交換留学生による座談会 熊本、そして日本

昨年暮れに、本学に留学中の交換留学生に集まってもらい、留学生活についてその他自由に日本語で語ってもらいました。司会は、国際交流委員の篠崎先生。同じく国際交流委員の米岡先生も同席。集まってくれた留学生は、ドイツ・ラインランド・プファルツ州立経済大学からのグレゴア・シュマルツ君、クレメンス・ジークファンツ君、シュテファン・トライアー君、シモーネ・トムセンさん、アメリカ・モンタナ州立大学からのマイケル・ギルカーソン君、キャロル大学からのパトリック・キーン君、そしてサンアントニオのインカーネットワード大学から熊本大学に留学してきているキンバリー・ワッツさんも参加してくれました。

篠崎／今日は皆さんの学生生活で思っていることを遠慮なく、感じたままに話してください。では最初に、日本の中の“熊本”に対してどんな印象を持っていますか。

パトリック／そうですね。東京とかはロサンゼルスやニューヨークのように大き過ぎるので熊本の方が好きです。それに熊本は田舎だし、綺麗な女性がいっぱいいます。(笑) 自然もとても残ってますね。東京は人が多過ぎます。熊本には色々な静かな場所があるしリラックスできます。それに人々も大変親切です。

グレゴア／僕も賛成です。例えば熊本の祭りはとても面白かったです。そして熊も見ました。もう一つは、“名物”がいっぱいありますね。辛子蓮根や馬刺しです。ドイツに帰るまでの残り3ヶ月の間に馬刺しを食べたいと思います。

篠崎／そうですね、私も日本人が親切というのは、全国どこに行っても同じじゃないかと思っています。他にはいかがですか。

クレメンス／熊本は安全ですね。夜でも自転車で行くこと



にこやかに語り合う出席者たち

が出来ますし、シモーネさんのような女性でも夜中の1時までジョギングできます。これは本当に素晴らしいことです。

篠崎／そうですね。それでは熊本学園大学ではたくさん友達が出来ましたか。

マイケル／はい。僕は合気道部に入部していますが、皆と一緒に練習したり、ESSのコンパに参加したりして友人と知り合いました。

篠崎／他の方々にはサークルに入っていますか。

シモーネ／私は、カロリーナさんと一緒に書道部に行きました。とても難しかったです。漢字をあまり知らないの、今はちょっと行っていません。

篠崎／でもあきらめないで。それでは次に、学園大のクラスはどうですか。日本語以外のクラスも受けているんですか。

クレメンス／マステン先生のクラスでは、日本の学生とい



ろんな話をして、良い経験になりました。時々英語も使いましたけど。

シュテファン／日本の学生は忙しすぎます。アルバイトしながら勉強もしますから。

米岡／日本の学生は8時間以上働く人もいますから。グレゴア／えっ？本当ですか。勉強できませんね。シュテファンさんや私は、以前銀行で働いていましたが、大抵の学生は勉強しながらアルバイトはしません。時間がありませんし、勉強が一番大切です。

篠崎／うーん、それは非常に耳が痛いことですね。これは学園大だけじゃなくて、日本中の大学生の現状かもしれないですね。

クレメンス／ドイツでも高校の後で大学に行くこともありますが、大抵は会社で働きます。そして、企業研修をしてから大学へ行きます。経験を得れば、自分が何をしたいのかよく分かるようになるので、これは本当に良いシステムだと私は思います。

篠崎／今おっしゃったシステムは、昼間でも出来るんですか。

グレゴア／例えば1週間のうちも、3～4日は会社で働いて、1～2日は大学の特別クラスに参加します。そして、2～3年後に特別な卒業をすると、色々な待遇を受けられます。例えば、人事の面接では、より経験のある人が採用されます。良い学歴や自信があっても、全く実務経験がなければ、その学生は断られてしまうでしょう。

篠崎／そうですか。それでは次に、女性の地位とか、振る舞い方で、何か違うと感じたことはありませんか。

キンバリー／そうですね。熊本大学では、たくさんの男性と一緒にいることもありますけど、私にはあまり話かけてきません。私が会話中に何か言うと、彼らはびっくりしたり、逃げたりする人も時々います。(爆笑)

篠崎／少しずつ変わってきているんですが、男性が女性にどうアプローチすればいいか、日本人同士でも分からない。だから、私は、皆さん方にそれを壊して欲しいんです。ええと、ホストファミリーにお世話になっているシモーネさんはどうでしょうか。

シモーネ／私のホストファミリーは典型的な日本の家族です。私は月曜から金曜まで一人で住んでいます。窪田さんは週末帰ってきて、金曜から日曜まで私と一緒に過ごします。

クレメンス／私は早く帰宅して、妻と娘と一緒に色々なところに行きます。それに、大きな決定は必ず皆と一緒にします。これは家族関係のとても大切なところですよ。

篠崎／ディスカッションを通じて、日本人が自分たちで気付かないことについても考えるきっかけになってくれば、それが国際交流の大きな意味になるでしょうね。



日本語で語りあった留学生たち

米岡／少し質問してもいいですか。多分、先程のバイトとも関連しますが、コンパには皆さん行ったことがありますか。これにはけっこうお金を掛ける学生も多いと思うんですが、皆さんはどう思いますか。もし安くコンパができれば、日本の学生もそんなにバイトしなくてもいいと思うんですが。

クレメンス／私はよく家でパーティーをします。私の家には大きな庭があって、バーベキューをします。時々、バーに行ってビールを飲みますが、そんなに高くはないです。

篠崎／なるほど。じゃ、アメリカの場合はどうですか。マイケル／いくつかありますけど、“ハウスパーティー”では、ちょっと夕食を食べて、飲んで、話をして、朝の4時に起きて、(爆笑)それか、“フラタニティーパーティー”です。このようなパーティーには、みんな飲み物を持ってきて、音楽をかけたり、踊ったりします。飲み過ぎることもありますね。(笑)

米岡／“フラタニティー”とは、社会クラブのような感じで、みんなが同じ家に住んだりもしますよね。それじゃ、もう一つ質問ですが、カラオケはありますか。ロサンゼルスにはいくつかあるんですけど、その使い方は違います。日本では、一人が歌って、他の人は自分の曲を探すんですけど、ロサンゼルスでは皆で合唱するんです。

クレメンス／ドイツにはカラオケは全然ありません。ギターを持ってきて、一緒に歌います。

篠崎／カラオケは本当に日本独特ですよ。でも、アジア中にもカラオケは広がっていますよ。中国や、韓国、タイにも。

クレメンス／はい、本当に楽しかったです。友達とコンパしたとき、カラオケでずっと歌ってました。(笑)

篠崎／それでは、そろそろフリートークキングは終わらせていただきます。これを機会に、これからも一緒に新しい日本を見つめ直していきたいですね。

今日はありがとうございました。

一同／ありがとうございました。

派遣留学生へのアンケート結果

今後の交換留学生の参考になるよう、昨年帰国した派遣留学生にアンケートを実施しました。紙面の都合で以下要約したものを紹介します。回答を寄せてくださった方々の留学先・期間・氏名は以下の通りです。アメリカ・モンタナ州立大学／短期・田辺順子、松原恭子、長期・佐々木栄治、野田光、内山明美、キャロル大学／長期・村上大介、菅原由奈子 サンアントニオ／長期・山本亮子、斉藤由香、イギリス・リバプール・ジョン・モーズ大学／長期・鎌守順子、中国深圳大学／長期・舌間正規。

1. 留学前に本学で実施した事前研修に対し、今後派遣される学生のために改善等の希望があれば書いてください。

○留学先大学のシステムの説明があるといいと思います。IDカードのこと、寮のこと、ミールサービスの種類も何種類もある中から選択になります。とにかく初めの2、3日は大変でした。右も左も分からないので、どこで何をしたらいいかわかりません。直前に前回の留学生と会って、質問などできる機会を設けて頂けたらと思います。(アメリカ短期)

○事前研修では、イギリスの大学からの留学生がリバプールの街のことや、国全体のことを私の質問に分かりやすく答えてくれたので、これからもこの形式なら十分予備知識を養うにはいいと思います。(イギリス長期)

○留学先の一般の授業に対応できるよう事前研修で原語の教科書を読んだり、留学先の授業を想定した授業を行ったりと、もっとレベルアップすれば、その時はきつくとも留学先で必ず役立つと思う。(アメリカ長期)

2. 留学先大学で滞在した寮及びルームメイトを簡単に紹介してください。

○リズというバーモント州出身の同級生の子でした。専攻は小学校教育でした。ちょっと冷たい感じがしたので初めは不安でしたが、私にとってもよく気配りをしてくれて、毛布や電気器具など自分の物を快く使わせてくれました。また、同じ階の子もほとんど同級生で仲良くしてくれ、すぐ馴染むことができました。困ったことがあっても相談すると、みんなが親身になって解決してくれました。食事に行くときも必ず誘ってくれて、とても心強かったです。淋しい思いをすることは全くなく、本当に恵まれていたと思います。(アメリカ短期)

○私の寮は「セント・チャールズ」という寮で5階建ての古い建物でした。そのうち女子寮は3階の一角だけであとは全部男子寮ということで、最初はびっくりしましたが、住めば都で後からは慣れてしまいました。私の部屋は3人部屋で、最初の学期は韓国人と台湾人、後の学期は同じ台湾人の女の子ともう一人台湾人の子と同室でした。同じ留学生ということで話が合い、とても楽しかったです。(アメリカ長期)

○私は特別にホームステイをさせて頂いたのですが、よい部屋を貸していただいたうえ、家族の皆さんもとても親切で親しみやすく、楽しく生活できました。食事もほとんど不自由なく、片付けをよく手伝いました。子供と接することができたのも良かったです。時々、小さなことに気をつかうこともありました。例えばステレオの音、掃除、外出等です。(イギリス長期)

○外国人だけの寮で、多くは日本人です。部屋は寮でも良い方で、なぜか豪華なダブルベッドです。(中国長期)

3. 本学学生と留学先大学の学生比較を簡単にお願いします。

○一番の大きな違いは授業の受け方だと思います。アメリカの学生は、体調が悪いか、何かよっぽどの理由がない限り授業を休みません。授業中の態度にしても、しゃべるのは先生に質問したり、自分の意見をいったりするときだけで、私語は全くありませんし、居眠りをしている人も1人もいませんでした。この点は、私を含め日本人の学生が見習わなければいけない点だと思います。(アメリカ長期)

4. 留学先の大学での留学生に対するサポート内容について教えてください。またその内容に対し、希望や要望があれば書いてください。

○熊本市と提携して留学生のサポートをされる日本人の先生が、授業料や学生寮の手続き、生活などのアドバイスをしてくださいました。大切なことに関してのみサポートして下さったので良かったと思います。というのは、サポートされ過ぎると、英語を使って自分で銀行の手続きをしたり、旅行の格安チケットを探したり、といった冒険ができなかったと思うからです。(アメリカ長期)

5. 留学中に何か困ったことがあったら、書いてください。

○到着日の夕食と翌日の朝食は、IDカードが発行されていないため学食で食事をすることができません。予め長期の留学生の人とよく連絡を取っておくと良いと思います。それから初めの健康診断で、日本とアメリカのシステムの違いから半年間薬を飲みなさいといわれてしまいます。ほとんどの日本人はツベルクリン反応で陽性になるからです。また、予防接種等についてのアンケートがありましたが、正直に書いていないと必要ない注射をされてしまうこともあります。(アメリカ短期)

○休暇中の過ごし方が困りました。友達も皆、実家に帰ったりして寂しく思いましたが、私もクリスマス時には、国際教育局からホストファミリーを紹介してもらい、今思うとかえって充実していたかもしれません。(アメリカ長期)

6. 本学のカリキュラム内容に関して、何か希望があれば書いて下さい。

○短期の場合日本では春休みということで丁度良いが、アメリカの大学では中途半端だったので、せめて1学期くらいはいたかった。(アメリカ短期)

7. 何か特筆すべきエピソードがあれば、お願いします。

○つたない英会話能力ながら、歴史のクラスやスピーチのクラスで、日本の歴史、日本人の慣習や社会における人間関係の重要性と観点の違い、等をしっかりと伝えられたことは、少なからず自分自身を見つめ直す契機となり、帰国してからの活力にもなっている。そして、日本語を多少なりとも本学への留学生たちに教えてゆく中で、身近な視点からの日本語へのアプローチをさせ、習得させる方法を試みている。(アメリカ長期)

○とにかく自分の寮と中国人の寮が離れているので、部屋にいただけでは何も始まりませんでした。やって来る中国人もいましたが、日本人なら誰でもよいといった感じの人もいて、彼らから友情は感じませんでした。本当の友達ができしたのは、自分から積極的に求めたからです。(中国長期)

1994年度 出身国(地域)別外国人留学生数 (12月11日現在)

国名 または 地域名	学部・学科留学生						研究留学生			大学院生			交換 留学生	合計	
	学部			短大部			合計	合計	合計	合計					
	1	2	3	4	1	2					合計				
中国	8	2	8	11	1		30名	15	10	25名	4	7	11名	2名	68名
台湾		1	2	6			9名						1	1名	10名
韓国			2			1	3名	1		1名	1		1名		5名
インド								1		1名	1		1名		2名
イスラエル	1						1名								1名
オーストラリア			1				1名								1名
イギリス													1名	1名	
アイルランド													1名	1名	
アメリカ													4名	4名	
ドイツ													4名	4名	
スペイン													1名	1名	
合計	9	3	13	17	1	1	44名	17	10	27名	6	8	14名	13名	98名

13	王 鵬	男	中国	経・経済
14	侯 鳳	女	中国	経・経済
15	潘 丹	女	中国	経・国経
16	方 志	男	中国	経・国経
17	李 仁	男	韓国	経・国経

3. 短期大学部学科研究留学生

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	邵 会 師	女	中国	社会科
2	蘇 克 勤	男	中国	社会科
3	陳 勇	男	中国	社会科
4	魏 世 維	男	中国	社会科
5	黃 洛 山	男	中国	社会科
6	馬 秋 紅	女	中国	社会科
7	韓 林	男	中国	社会科
8	于 秋 明	女	中国	保育科
9	周 燕	女	中国	教養科
10	于 晶	女	中国	教養科

1994年度留学生

1. 学部留学生・学科留学生

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	何 兆 斌	男	中国	商・商1年
2	顧 建 勳	男	中国	商・商1年
3	劉 凱 玲	女	中国	商・商1年
4	吳 霄 宇	男	中国	商・経営1年
5	李 競	男	中国	商・経営1年
6	AMIR RAZ	男	イスラエル	商・経営1年
7	張 衛 琼	女	中国	経済・経済1年
8	黃 益 培	男	中国	経済・国経1年
9	任 佳	女	中国	経済・国経1年
10	黃 丹 倩	女	中国	短・保1年
11	邱 鴻 淳	男	台湾	商・経営2年
12	楊 軍	女	中国	商・経営2年
13	何 成 雨	男	中国	休学中
14	林 木 鳳	女	中国	商・商3年
15	権 奇 雲	男	韓国	商・経営3年
16	廖 柏 明	男	中国	商・経営3年
17	楊 思 睿	男	中国	商・経営3年
18	梁 湖 南	女	韓国	商・経営3年
19	王 建 平	男	中国	経済・経済3年
20	廖 志 武	男	台湾	経済・経済3年
21	沈 誌 默	男	中国	経済・経済3年
22	SUSAN ALLEN	女	オーストラリア	経済・国経3年
23	陳 瑞 君	女	台湾	経済・国経3年
24	林 瀚	男	中国	経済・国経3年
25	陸 兵	男	中国	経済・国経3年
26	劉 毅	男	中国	経済・国経3年
27	韓 景 光	男	中国	商・商4年
28	慕 強	男	中国	商・商4年
29	李 勤	男	中国	商・商4年

30	劉 梅	女	中国	商・商4年
31	呂 躍 進	男	中国	商・商4年
32	姚 礫	男	中国	商・商4年
33	楊 兆 利	男	中国	商・経営4年
34	吳 志 仁	男	台湾	商・経営4年
35	李 剛 剛	男	中国	商・経営4年
36	陳 惠 敏	女	台湾	商・経営4年
37	曲 家 岩	男	中国	経済・経済4年
38	陳 宏 孟	男	台湾	経済・経済4年
39	李 尚 家	男	台湾	経済・経済4年
40	李 芳 琪	女	台湾	経済・国経4年
41	袁 秀 雲	女	中国	経済・国経4年
42	陳 秋 娟	女	台湾	経済・国経4年
43	李 谷 偉	男	中国	経済・国経4年
44	柳 貞 姫	女	韓国	短大・社2年

2. 学部研究留学生

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	郁 樹 德	男	中国	商・商
2	周 淨	女	中国	商・商
3	楊 津 京	男	中国	商・商
4	HUTOXI M DAMANIA	女	インド	商・商
5	郝 小 東	男	中国	商・商
6	辜 宏	男	中国	商・経営
7	金 春 奉	男	中国	商・経営
8	林 玉 清	男	中国	商・経営
9	文 勝 龍	男	中国	商・経営
10	陳 麗	女	中国	商・経営
11	王 念 海	男	中国	商・経営
12	宋 修 廣	男	中国	商・経営

4. 大学院生

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	張 明	女	中国	院・商学1年
2	韓 相 倫	男	韓国	院・商学1年
3	蔡 強 善	男	中国	院・経営学1年
4	盛 永 俊	男	中国	院・経営学1年
5	宗 目 瀾	男	中国	院・経営学1年
6	MISHRA MANISH KUMAR	男	インド	院・経営学1年
7	応 鳴 一	女	中国	院・商学2年
8	徐 麗 君	女	中国	院・商学2年
9	楊 奇 原	男	台湾	院・商学2年
10	羅 智 偉	男	中国	院・商学2年
11	鐘 曉 清	女	中国	院・経営2年
12	苗 鉄 鋒	男	中国	院・経営2年
13	湯 小 寧	男	中国	院・経営2年
14	劉 雲 龍	男	中国	院・経営2年

5. 交換留学生

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	張 蓉 霞	女	中国	商学4年
2	庄 东 燕	女	中国	経営4年
3	Patrick Keane	男	アメリカ	国経4年
4	David Grant	男	アメリカ	国経4年
5	Michael Gilkerson	男	アメリカ	国経4年
6	Laura Gilkerson	女	アメリカ	国経2年
7	Kerrie Waring	女	イギリス	経営3年
8	Sandra Kelly	女	アイルランド	国経3年
9	Clemens Siegfanz	男	ドイツ	国経3年
10	Gregor Schmalz	男	ドイツ	経済3年
11	Stefan Treier	男	ドイツ	商学3年
12	Simone Thomsen	女	ドイツ	経営3年

6. サンアントニオ市派遣留学生

No.	氏名	性別	国籍	学籍
1	Carolina Ballester	女	スペイン	国経

本学留学生への交流の主な案内(1994年度)

名 称	主 催	内 容	期 日	備 考
留学生の会	熊本YWCA	日本の家庭紹介、各自行事への案内	年間を通じ随時入会申込み受付	
レクレーションと夕食交流会	全国電気通信労働組合九州地方本部	ゲーム等を通じての交流会	6/1	10名参加
熊本JC国際交流パーティー	(社)青年会議所	お国自慢料理パーティ	6/12	2名参加
芦北「世界味めぐり」とホームステイ	芦北小さな地球家族	芦北の皆さんとのホームステイ交流会	6/11~12	9名参加
留学生の方との交流会	武蔵中学校	遊び・言葉・習慣を紹介する	7/7	アメリカ・イギリス・中国・韓国4名
レニングラード少年少女合唱団	国際文化交流を進める会	コンサートへのご招待	7/19	20名参加
水俣国際親善競り舟大会	水俣市	大会出場・ホームステイ	7/30~8/1	9名参加
北海道・国際交流のつどい	北海道国際交流センター	夏期休業中のホームステイ	8/16~8/31	8名参加
火の国まつり	熊本市		8/12	多数参加
ふれあいフォーラム天明	熊本市		9/23	12名参加
'94 全日本留学生フォーラム広島	'94 全日本留学生フォーラム広島実行委員会	全国の留学生10名が参加	8/26~28	1名参加
九州女学院祭り「留学生スピーチ」	九州女学院高等学校	全校生徒へのスピーチ	10/2	韓国・インド・中国計4名
留学生とのスポーツ交流会	熊本学園大学学生議会	本学学生とのゲーム形式のスポーツ交流	10/16	47名参加
大津高等学校文化祭でのスピーチ	大津高等学校	文化祭ステージ部門での体験談スピーチ	10/29	オーストラリア・中国計2名
国際理解教育等の活動	楡木小学校		12/8	韓国・中国 韓国 アイルランド・インド 中国・スペイン 中国・インド
	鮑田西小学校		1/28	
	河内小学校		2/28	
「ザ・ワールドクラブ」	大江小学校	児童が計画したプログラムによる交流	毎月1回金曜日	韓国・中国・インド
熊本在住の留学生と懇談会	日本貿易振興協会熊本貿易情報センター	県内企業家との懇談会	12/13	10名参加
ファミリークリスマス	流通団地共同組合青年部		12/14	4名参加
クリスマス会	財団法人熊本市国際交流振興事業団		12/22	13名参加
熊本市消防出初式	熊本市消防局	英語・中国語による通訳有り	1/8	
留学生との勉強会	健軍東小学校家庭教育学級	保護者で構成される家庭学級でお話	2/2	インド・中国2名参加
春節の集い	熊本県日中協会	懇談と夕食会	2/16	11名参加
ユネスコ文化財を見る会	熊本ユネスコ協会		2/5	6名参加
ロータリークラブとの交流会	熊本県下のロータリークラブ	講話と懇談会	随時	多数参加

1994年度・本学留学生の奨学金受給実績

★各種奨学金受給者の合計

学部留学生	37名	} 合計52名
学科留学生	1名	
大学院生	13名	
学部研究留学生	0名	
学科研究留学生	1名	

★本学で扱った奨学金の受給状況

1. 私費外国人留学生学習奨励費

	推 薦	採 用
学部留学生	15	14
学科留学生	1	1
大学院生	6	6

2. 熊本県外国人留学生奨学金

	応 募	採 用
学部留学生	18	8
学科留学生	0	0
大学院生	2	0
学部研究留学生	0	0
学科研究留学生	1	1

3. ロータリー寿崎奨学金

	応 募	採 用
学部留学生	31	7
学科留学生	2	0
大学院生	8	3
学部研究留学生	7	0
学科研究留学生	1	0

4. 在熊外国人留学生ライオンズクラブ奨学金

	応 募	採 用
学部留学生	22	6
大学院生	4	0
学部研究留学生	1	0

5. ロータリー米山記念奨学金

	応 募	採 用
学部留学生	個人自由応募	1
大学院生		1

6. 肥後銀行国際交流奨学金

	応 募	採 用
学部留学生	18	0
大学院生	3	2

7. 国内採用による国費外国人留学生

	応 募	採 用
学部留学生	0	0
大学院生	0	0

8. 寿屋育英財団奨学金

	応 募	採 用
学部留学生	16	2
大学院生	8	2
学部研究留学生	7	0
学科研究留学生	3	1
学科留学生	2	0

9. 平和中島財団外国人留学生奨学金

	応 募	採 用
大学院生	7	0
学部留学生	5	0

1994年国際交流EVENTS

月	米国・モンタナ	韓国・大田	中国・深圳	英国・リバプール	独国・ルートビヒスハーフェン
1月	10日 UMロバート・ハウズマン先生来学 24日 UMゲイリー・クック氏来学		11日 北京対外経済貿易大学 干吟梅教授来学		
2月	2日 春期短期派遣留学生(5名)出発	26日 尹光鳳先生(大田大学校 交換教員)離熊 26日 嵯峨一郎先生(大田大学 校交換教員)出発	17日 舌間正規くん(深圳大学 交換留学生)帰国 24日 脇元由布子さん、溜淵美 和さん(深圳大学交換留 学生)出発		
3月	30日 春期短期派遣留学生(5名)帰国	12日 洪承蘭先生(大田大学校 交換教員)来熊	13日 郭来舜先生(深圳大学交 換教員)離熊		
4月			15日 張蓉霞さん、庄東燕さん (深圳大学交換留学生)来熊		
5月	15日 野田光くん、佐々木栄治 くん(MSU 交換留学生) 帰国 16日 菅原由奈子さん(キャロ ル大学交換留学生)帰国 18日 内山明美さん(MSU 交 換留学生)帰国			31日 リバプール・ジョン・モ ーズ大学 ジョン・コリン ズ先生来学	
6月			26日 吳嶸さん(深圳大学交換 留学生)離熊 28日 尤梅さん(深圳大学交換 留学生)離熊		
7月		5日 大田大学校経営行政大学 院研修団来学		27日 林正人くん(リバプー ル・ジョン・モーズ大学交 換留学生)帰国	
8月	1日 堀正広先生(MSU 交換 教員)出発 4日 宗野泰之くん(MSU 交 換留学生)田口雅美さん (キャロル大学交換留 学生)出発 5日 ロバート・スミス先生 (MSU 交換教員)離熊 6日 宮原千佳子さん(キャロ ル大学交換留学生)出発 14日 大津山希さん(MSU 交 換留学生)出発 15日 溝上理恵さん(MSU 交 換留学生)出発 15日 カーク・マスデン先生 (MSU 交換教員)帰国 20日 村上大介くん(キャロル 大学交換留学生)帰国 24日 第6回モンタナ研修団出 発	22日 嵯峨一郎先生(大田大学 校交換教員)帰国 31日 第4回大田大学校訪問学 生研修団出発		15日 上村勝男くん(リバプー ル・ジョン・モーズ大学交 換留学生)出発 20日 鎌守順子さん(リバプー ル・ジョン・モーズ大学交 換留学生)帰国 28日 ロベルト・フェラーリく ん(リバプール・ジョン・ モーズ大学交換留学生) 離熊	
9月	1日 デイビット・グラントく ん(MSU 交換留学生)パ トリック・キーンくん(キ ャロル大学交換留学生) 来熊 6日 リチャード・ロッシュ先 生(MSU 交換教員)来熊 マイケル・ギルカーソン くん、ローラ・ギルカー ソンさん(MSU 交換留 学生)来熊 12日 第6回モンタナ研修団帰 国	6日 大田大学校訪問学生研修 団帰国		1日 クライブ・ホワイトくん(リバ プール・ジョン・モーズ大 学交換留学生)離熊 3日 佐藤誠二くん(リバプー ル・ジョン・モーズ大学交 換留学生)出発 11日 サンドラ・ケリーさん(リバ プール・ジョン・モーズ大 学交換留学生)来学 12日 ケリー・ウェアリングさ ん(リバプール・ジョン・ モーズ大学交換留学生) 来熊	3日 クレメンズ・ジークファ ンツくん、シュテファン・ トライアーくん、グレゴ ア・シュマルツくん、シモ ーネ・トムセンさん(ライ ンランド・プファルツ州 立経済大学交換留学生) 来学 13日 ラインランド・プファル ツ州立経済大学 生熊文先生来学
10月		28日 大田大学校開校14周年 記念式典参加			
11月					
12月	17日 ローラ・ギルカーソンさん (MSU 交換留学生)離熊			3日 欧州協定校訪問団一行出発 11日 欧州協定校訪問団一行帰国	

月	仏国・リヨン	教員研修	海外ゼミ研修	その他
1月			31～2/5 花谷ゼミ(ハワイ)	14日 慶尚北道大学生訪日研修団来学
2月			7～10 花谷ゼミ(韓国) 2～6 清野ゼミ(インドネシア/バリ島) 2～8 高瀬ゼミ(ロンドン/ローマ) 2～8 朴ゼミ(ロンドン/ローマ) 4～6 宮崎ゼミ(ソウル) 26～3/4 西ゼミ(北京/西安/上海)	14日 サンアントニオ市インターネットワード高校一行来学
3月			3～5 岡本ゼミ(ソウル) 23～27 用稲ゼミ(サイパン)	14日 北京第二外国語学院訪問団来熊
4月				21日 甲南イリノイ学生研修団来熊 23日 甲南イリノイ学生研修団離熊
5月				26日 アメリカ・モンタナ州知事 マーク・ラスコー氏 中国・広西壮族自治区副主席雷宇氏 韓国・忠清南道知事 朴重培氏来学 30日 インターネットワード大学 後藤隆士先生来学
6月				7日 ネリー・サンチェスさん(サンアントニオ市派遣留学生)離熊 10日 山本亮子さん(熊本市派遣留学生)帰国
7月	28日 リヨン商科大学 米山悦夫先生来学 30日 穴井隆二くん(リヨン商科大学交換留学生)帰国	31日 木下隆雄先生(英国・オックスフォード大長期留学)出発 ※'95.8.20に帰国予定		15日 国際経済学科「外国事情研修」米国班出発 18日 国際経済学科「外国事情研修」韓国班出発 25日 国際経済学科「外国事情研修」中国班出発 30日 JAL スカラシップホームステイプログラム一行15人来学 30日 斉藤由佳さん(熊本市派遣留学生)帰国
8月	28日 松岡高弘くん(リヨン商科大学交換留学生)出発	5日 落合俊行先生(米国・ワシントンジョージタウン大長期留学)出発 ※'95.8.4.に帰国予定 21日 新立義文先生(イタリア/ドイツ/スイス/スペイン/イギリスへ出張)出発		3日 メリッサ・アルバラードさん(サンアントニオ市派遣留学生)離熊 15日 国際経済学科「外国事情研修」韓国班帰国 16日 国際経済学科「外国事情研修」米国班帰国 17日 福本洋くん、坂口嘉朱代さん(熊本市派遣留学生)出発 22日 アメリカ・モンタナ州政府新駐日代表タミー・ランニング女史来学 24日 ワシントン大学関係者来学 25日 国際経済学科「外国事情研修」中国班帰国
9月		6日 新立義文先生(イタリア/ドイツ/スイス/スペイン/イギリスへ出張)帰国 16日 田中節男先生(仏国・リヨン商科大学長期留学)出発 ※'95.9.15に帰国予定	7～12 安田ゼミ(シドニー) 7～12 田島ゼミ(シドニー/香港)	5日 日中企業管理シンポジウム来学 26日 カロリーナ・バイエステールさん(サンアントニオ市派遣留学生)来学
10月				
11月			20～23 矢野ゼミ(ソウル)	15日 韓国・光州直轄市公務員教育院研修団来学 17日 第5回韓国元日本留学生の集い参加者来学
12月			17～23 杉田ゼミ(パリ/ベルリン) 24～29 李ゼミ(北京/杭州/蘇州/上海)	

日本人学生の実態調査 1994年7月実施

1982年姉妹校提携を期に大きく動き出した本学の国際交流を学生達はどの様に受け止めているのだろうか。

盛たくさんの交流プログラムにチャレンジする学生が少ない、増えないとの悩みを持ち続けていた国際交流委員会が初めて学生の実態調査、動向調査を実施する事となった。

本学の国際交流プログラムについて、本学の留学生との交流について、本学の国際交流センターについての関心度・理解度を尋ねる内容となっている。800名に近い日本人学生から回答を得た。同委員会ではアンケートの集計結果を基に、国際交流に対して一人でも多くの学生が興味をもつ策を検討する貴重なデータと考えている。

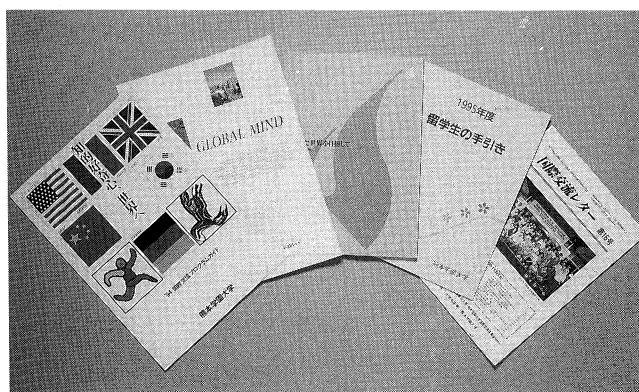
留学生の生活実態調査 1994年11月～12月実施

1983年に文部省が打ち出した21世紀初頭までに留学生を10万人受入れる施策で、全国的に留学生が増加している折、本学でも最近では毎年100名を越える留学生が入学している。

このような本学で学ぶ留学生が学生生活を充実させ、楽しく豊かに送れるための基礎資料を作成する意図で、今回、初めての留学生生活実態アンケート調査を実施することとなった。この調査では「留学目的」や住居、生活費、奨学金、健康、交通などの「生活実態」、困った時の相談先や日本語の理解度などの「適応」、本学の友人などの「その他」について調査し、可能な限りその全体像を浮き彫りにできるように試みている。

今後、アンケート調査集計結果の分析作業を進め、4月中には報告書を編集・発行する予定である。

国際交流関係出版物



国際交流委員会では、この広報誌『国際交流レター』（創刊号から前号まではB5版）以外にも、1992年に本学創立50周年を記念して『開かれた世界を目指して—国際交流10年の歩み』を編集・発行している。また、国際交流センター事務室では本学の英文パンフレット『GLOBAL MIND』、そして『国際交流プログラムガイド』と『留学生の手引き』を編集・発行している。

SEMINARS

国際交流センター事務室主催
交換教員による教職員向け語学教室

1. 韓国語会話クラス
講師：洪承禧先生（韓国・大田大学校）
開催日：1994年4月20日から1994年12月22日まで原則として水曜日
時間：17:10～18:10
2. 英語会話クラス(1)
講師：ロバート・スミス先生（米国・モンタナ州立大学）
開催日：1994年4月19日から1994年7月19日まで原則として火曜日
時間：17:30～18:30
3. 英語会話クラス(2)
講師：リチャード・ロッシュ先生（米国・モンタナ州立大学）
開催日：1994年10月11日から1995年1月17日まで原則として火曜日
時間：17:30～18:30

※他にも研究所や学部等が主催する講演会等多数あり、記載は省略する。

国際交流委員会が新メンバーでスタート！

1994年1月より国際交流委員が下記のメンバーに交代した。
(敬称略)

国際交流委員長	勝部 伸夫
国際交流委員	
商学部	広田 勇 安田 義郎
経済学部	坂上 智哉 朴 哲洙
外国語学部	西 紀昭 米岡ジュリ
社会福祉学部	篠崎 正美 宮崎 俊策
短期大学部	今井 義量 原田 史郎
国際交流センター事務室	星子 三郎 西村 禮二

国際交流センター事務室の スタッフ紹介

室長	星子 三郎
室長補佐	西村 禮二
	喜佐田 知子、切通 しのぶ、川邊 裕桂、 園田 菜里、野田 光



熊本学園大学

KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY

〒862 熊本市大江 2 丁目5番 1 号

TEL.096(364)5161

